

井原西鶴『武道伝来記』における〈伝聞表現〉と世間

弘前大学教育学研究科修士二年 15GP203 根本 亮輔

はじめに

第一章 研究史及び問題の所在

第一節 作品研究史

第一項 翻刻

第二項 作者

第三項 作品観・評価

第二節 伝聞表現に関する言及

第一項 谷協理史氏による見解

第二項 杉本つとむ氏による見解

第三節 問題の所在及び仮説

第一項 問題の所在

第二項 仮説

第二章 検証

第一節 立場及び用語の規定

第一項 筆者の立場

第二項 〈伝聞表現〉の規定

第三項 〈語り手〉の規定

第二節 仮説成立の条件確認

第一項 『武道伝来記』序文における〈語り手〉の賞賛

第二項 『武家義理物語』巻三の一「発明は瓢箪より出る」における〈語り手〉の批判対象

第三節 西鶴武家物における〈伝聞表現〉

第一項 西鶴武家物における〈伝聞表現〉一覧

第二項 『武道伝来記』における〈伝聞表現〉の特徴

第三項 〈伝聞表現〉に関するまとめ

第三章 『武道伝来記』における認識のズレ

第一節 『武道伝来記』の内実

第一項 「高名」から逸脱する物語

第二項 伝聞の危うさを体現する物語

第二節 『武道伝来記』のズレ

第一項 善悪に対するズレ

第二項 人物造形のズレ

おわりに

〈補足資料〉〈参考文献〉

はじめに

本論文では井原西鶴による『武道伝来記』について検討する。『武道伝来記』は貞享四年成立の作品であり、『武家義理物語』（貞享五年）、『新可笑記』（元禄元年）と並んで武家物作品の一つとして位置付けられている、西鶴中期の浮世草子作品である。また全編に及んで武家を扱っているという点で純武家物としては最初の作品にあたる。副題に示された「諸国敵打」から明らかとなり、さまざまな内容の敵打にまつわる話が八巻各四話、合計三十二話収められている。以下序文を確認したい。

和朝兵揃の中に為朝のくろがねの弓むさし坊か
長刀朝比奈かちからこふかけ清が眼玉これらは見
ぬ世の事中古武道の忠義諸國に高名の敵うち其は
たらき聞伝て、筆のはやし詞の山心のうみ静に御松
久かたの雲によるこひの舞鶴是を集ぬ『武道伝来記』
序文）

この序文に示されている「諸國に高名の敵うち其はたらき聞伝て」という記述から明らかとなり、本書は伝聞体をとる作品である。実際に伝聞した内容か否かは別にして、少なくとも伝聞体であるという体裁で「高名の敵うち」を「集」たとしている。本論はこの点に着目し、なぜ『武道伝来記』が伝聞体をとって物語を所収しているのか、『武道伝来記』における伝聞体の機能とはいったいどのようなものかを検討していく。

従来の『武道伝来記』研究において、伝聞という観点から発せられた論考は決して多いとは言えない。だがこの問題を取り扱うことは『武道伝来記』研究において、決して無駄なことではないように思う。それは第一に、従来の『武道伝来記』研究やその他の西鶴作品研究において顕著であった、語り手（西鶴）という前提の認識を捉え直すことが可能となりうるという点である。伝聞はいわば複数の語り手を経由することで語られる物語であることを示すため、これまで権威的に認識されてきた語り手としての西鶴に、より柔軟で多様な側面を見出しうると考える。第二に、『武道伝来記』研究においてはやくから指摘されていた、序文と所収内容とのズレ¹、すなわち「高名の敵うち」を「集」たとしているにも拘らず、敵打の矛盾を感じさせるような内容の物語を多く収めているという矛盾点を解消する手がかりとなりうるという点が挙げられる。これは第一の点と関連して、伝聞体を探ることにより語り手の多面性を問

い直すことができるのであれば、「高名な敵うち」と認識する主体を問い直すということにつながると思われるからである。以上の二点を視野にいれ、『武道伝来記』における伝聞について、その機能および位置づけを探っていきたい。

具体的に第一章では『武道伝来記』の翻刻および作者に関する一般的な把握を確認し、また近代以降の『武道伝来記』研究における主要なテーマを洗い出すことでそれらの論考がどのような認識を土台として展開されているのかを探る。また『武道伝来記』における伝聞体について言及したものとして谷脇理史氏、杉本つとむ氏の論考を確認し、『武道伝来記』の伝聞体がこれまでどのように処理されてきたのかを探る。その上で本論を進める上での主軸となる仮説を設定する。

第二章では仮説の前提条件および本論で使用する用語の規定を確認しつつ、『武道伝来記』における〈伝聞表現〉にどのような特徴が見られるのかを明らかにする。具体的に西鶴作品の中で同時期、同ジャンルの作品として位置づけられている『武家義理物語』『新可笑記』を比較対象としてその特徴について探り、どのような機能が認められるか、またどのような位置づけが可能かを検討する。

第三章では、第二章で得られた『武道伝来記』における〈伝聞表現〉の機能を踏まえ、読者という視点を導入しつつ前述の『武道伝来記』に生じる矛盾について、どのような処理が可能かを考察する。具体的に『武道伝来記』計三十二話の中に、序文に示されたような「高名の敵うち」と言い難いような内容の物語がどれほど含まれているのかを整理する。また序文と本文のズレと同様に、語り手の認識と、読者が受ける印象とが一致しないような内容の物語をいくつか挙げ、『武道伝来記』における語り手をどのように位置づけることができるかについて考察する。

なお本論を進めるにあたって、複数の西鶴作品を比較しつつ使用することを期して、テキストとして、初版本を底本として用いる『定本西鶴全集』第四巻、第五巻（中央公論社・昭和三十九、三十四年刊）を中心に使用した。また影印本として近世文学資料類『武道伝来記』（中央公論社・昭和五十年）を適宜参照した。テキスト引用にあたって旧字、異字体等は適宜改めた。傍線、中略等特に断りのない場合は筆者による。

¹ 山口剛氏は『西鶴名著全集 下』解説（日本名著全集刊行会・昭和四年）において「其後の敵討物に必ず伴ふやうな武勇談に専らでない」としている。この認識は『新版近世文学研究事典』（おうふう・平成十八年）に「敵討という行為を賛美するだけでなく、矛盾も感じさせる内容である。」とあるように、現代でも確認できる。

第一章 研究史概略

第一節 作品研究史

『武道伝来記』における伝聞表現についての論考を確認する前に、これまで本作がどのような観点から論じられてきたのかを示し、本論で扱う問題がその中でどう位置づけられるのかを探索するため、近代以降の『武道伝来記』の扱いや評価、論考を整理しその枠組みを確認しておきたい。

第一項 翻刻

森鷗外主催の『しがらみ草子』に明治二十二年十月の第一号から同二十三年九月の第十二号にかけて翻刻された『好色二代男』が西鶴作品の初めての活字化であった。²その後一部が作品ごと翻刻されていくが、『武道伝来記』は全集に所収される形で初めて活字化される。³尾崎紅葉、渡部乙羽校訂、明治二十七年刊の帝国文庫『校訂西鶴全集』(博文館・上下巻)の上巻である。渡部は序文に「西鶴が著書の世に知られしもの」として「元禄五年版の廣益書籍目録大全岡田天幸堂氏所蔵と、二三の古書」⁴によって四十一の作品名を挙げており、なかには現在西鶴の作であることを否定されているものも混入しているが、全集に所収されている十八作品は現在において『好色三代男』を除きひとまず西鶴の著とされている諸作である。『武道伝来記』をはじめ多く淡島寒月所蔵本を底本としたことを示す。

その後も『武道伝来記』は専ら全集に採録される形で出版される機会を多く得る。滝田貞治氏の『西鶴の書誌学的研究』⁵は西鶴作品全体の翻刻本について詳細に示しているがその中で『武道伝来記』に関わるものとして、幸田成幸、尾崎徳太郎編集、明治三十六年・同三十八年刊の『西鶴文粹』(春陽堂・上中下巻)下巻、熊谷千代三校訂、明治四十年刊の『校訂西鶴全集』(平民書房・上下巻+附巻)上巻、古谷知新校訂、明治四十三年刊の『元禄時代小説集』(国民文庫刊行会・上下巻)上巻、同明治四十三年日本名著文庫『西鶴集』(図書出版協会・三巻)第二、石川健次郎編集、明治四十四年『西鶴名作集』(精文館)、藤井乙男校訂、大正二、三年刊の『西鶴文集』(有朋堂・上下巻)上巻、江戸文学研究会編集、大正四、五年刊の『浮世草子』(向陵社・七巻)一卷、日本名著会編、大正八年『西鶴傑作集』(内外出版協会・天地人三巻)地巻、鴻巣盛廣・次田潤・栗原武一郎編、大正十三年刊『西鶴近松抄』(裳華房)、正宗敦夫校訂、大正十五年・昭和三年刊

の『西鶴全集』(日本古典全集刊行会・十一巻)等が挙げられている。なお『西鶴文粹』は刊行の翌年、明治三十九年に上中下合本が発行され、大正五年には編者名義を幸田露伴、尾崎紅葉に改めた縮字本が刊行されている。抜粋本であり、『武道伝来記』は全八巻三十二話中、一・一、二・四、四・一、五・四、六・三、八・四の都合六話が採録されている。完本で翻刻されていないのは他に『西鶴名作集』(精文館・一・一・二・三、二・一、三・二・四、四・一、五・二、六・一、八・一・二)と『西鶴近松抄』(裳華房・二・二、六・三)が挙げられる。また『校訂西鶴全集』(平民書房)は明治四十四年、版元を岡崎屋書店に改めた上下合巻本が刊行されている。その他合本改装して出版されたものが二、三ある。⁶ここから『武道伝来記』が全集の中でも特に西鶴作品を広く採録する傾向のものに多く所収されていることが伺われ、好色本のように二、三編の中に編まれるといったことがない。ただ、滝田氏も前掲書で指摘している通り、『西鶴集』(図書出版協会は巻頭に「西鶴の作品の内より、勸善懲惡の物語たるべきもの」)を採録したとしており、その中に『武道伝来記』を編入している点で興味深い。

昭和に入ると、山口剛校訂、昭和四年刊の『西鶴名作集』(日本名著全集刊行会・上下巻)や藤村作校訂、昭和五年刊の『昭和版帝国文庫『西鶴全集』(博文館・前後巻)等従来の全集への所収に加え、昭和七年、岩波文庫よりかねてから近世作品の校訂を数多く手掛ける和田万吉による『武道伝来記』が刊行される。昭和版帝国文庫『西鶴全集』は明治の帝国文庫『校訂西鶴全集』に「扶桑近代艶隠者」「懷硯」「好色旅日記」「色里三所世帯」「絵入西鶴名残の友」の五編を加えた二十三作品を所収しており、戦前においては「最も収容作品が多い」⁷とされている。また、『西鶴名作集』は山口氏の校訂者としての徹底した態度等から「戦前の西鶴翻刻書のうち、もっとも権威あるもの」⁸と称された。この『西鶴名作集』下巻の巻頭には後に『山口剛著作集』に所収されることとなる氏の各作品への解説が収められている。

戦時下においては、西鶴本の多くが閲覧禁止となる中、稀書複製会により昭和十六年から同十七年にかけて木版複製本『武道伝来記 諸国敵討 絵入』(米山堂・八巻)が出版されており、一般読者に読まれることとなる⁹。

戦後において特筆すべきは、まず暉峻康隆、野間光辰校訂、

² 神保五弥「近代における西鶴研究」野間光辰 暉峻康隆編『国語国文学研究史大成十一 西鶴』(三省堂・昭和三十九年)。

³ 滝田貞治『西鶴の書誌学的研究』(白帝社・昭和十六年初版昭和四十七年複製版)。

⁴ 尾崎紅葉 渡部乙羽校訂『校訂西鶴全集 上』(博文館・明治二十七年)。
⁵ 『西鶴の書誌学的研究』(前掲)。

⁶ 『日本名著文庫 西鶴集』(図書出版協会・明治四十三、四十五年)「近代デジタルライブラリー」に公開のものを参照。
<http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/878454?ocOpened=1>

⁷ 森銑三『西鶴と西鶴本』(元々社・昭和三十年)

⁸ 神保五弥「近代における西鶴研究」(前掲)。
⁹ 神保五弥「近代における西鶴研究」(前掲)。

昭和二十四年・同五十年刊の『定本西鶴全集』(中央公論社・十四卷)の刊行である。『国語国文学研究史大成十一 西鶴』において各作品に対する研究の成果を踏まえた所論や問題提起、詳細な頭注を付している点等から「あらゆる意味で底本の名に恥じない」¹⁰とされているが、一方で森銃三氏は「俳諧方面の著作をも普く網羅して、名實ともにふさはしい全集を作らうとしてゐる點に敬意が拂はれるが、模擬西鶴作品を最も多く収容する一事には、また大きな不満が表せられる。」¹¹としている。また横山重、前田金五郎校訂、昭和四十二年刊の岩波文庫『武道伝来記』は、かねて前田氏が『文学』に寄稿された「武道伝来記」の事実と創作」を踏まえ、氏の『武道伝来記』素材探索の業績の総括となる。この他諸研究叢書等では麻生磯次・富士昭雄訳注、昭和四十九・五十四年刊『対訳西鶴全集』(明治書院・十六卷)、西島孜哉編、昭和五十八年刊の『武道伝来記』(桜楓社)、谷協理史・富士昭雄・井上敏幸校注、平成元年の『新日本古典文学大系七十七 武道伝来記・西鶴置土産・万の文反古・西鶴名残の友』(岩波書店)等がしばしば紹介され、現在『武道伝来記』を研究する者にとって身近なテキストであるといえる。¹²

影印本としては昭和五十年『近世文学資料類聚 西鶴編八 武道伝来記』(勉誠社)、西島孜哉編、昭和五十九年刊の『武道伝来記』(桜楓社)等が出版されている。

第二項 作者

前述の通り『武道伝来記』は明治二十七年、帝国文庫『校訂西鶴全集』において西鶴作の一つとして初めて翻刻される。西鶴の署名はないものの「鶴永」「松寿」の印記が序文末に捺されており、また元禄五年刊『廣益書籍目録大全 五卷』に「西鶴」の名と共に書名が記されている点¹³等から西鶴作と認識されてきた。

近代に入り書誌学的研究に定評のある水谷不倒氏が大正九年「浮世草子西鶴本」において序文に注目し「『舞鶴是を集めぬ』といふ詞のうちに作者の名が含ませてある」¹⁴とした点も、作者が西鶴であることを示す一要因として定説化した。だが森氏は昭和二十四年「書評・野間光辰氏著『西鶴新攷』」において「近代艶隠者と共に、右の二作品(本朝桜陰比事・新可笑記)も、なほ武道傳來記、武家義理物語俗つれづ

れをも、私は他作なりとするのである」¹⁵として『武道伝来記』の西鶴作たることを否定する。これに対して翌年昭和二十五年、東明雅氏は「武道伝来記について―森氏の非西鶴説を駁す―」と銘打って反論を試みる。具体的に前述の『廣益書籍目録』の記載、序・署名・印記に加え「のみ」「はじめ」「されば」等の西鶴独特の語法について考察を深め、「以上の三點を以て、武道傳來記を西鶴の眞作なりと認め」¹⁶ると強く主張した。東氏は森氏の発言力の大きさを危惧して即座に反駁する姿勢を見せたが、自身でも触れている通り、「書評・野間光辰氏著『西鶴新攷』」において森氏がその根拠を示さぬまま展開された反論であった。

森氏はこの直後「私の西鶴研究序説」¹⁷を皮切りに度々西鶴作の是非を問い、その諸論が昭和三十年『西鶴と西鶴本』にまとめられることとなる。ここで「好色一代男」以外の全てを非西鶴説とする結論を示され、中でも武家物作品を低く評価しその作者を西鶴の門下北条団水と断じた。方法として森氏は団水著『昼夜用心記』『日本新永大蔵』より「団水の慣用句」を抽出し、武家物作品の中に多く散見できるとしてその主な根拠となした。¹⁸この大胆な主張に対して以降論戦が交わされることとなる。例えば雑誌『文学』において板坂元氏は号をまたぐ形で森氏と直接やり取りをされている。板本氏は昭和三十年九月号「西鶴本の問題」森銃三氏の説をめぐって―¹⁹において森氏が非西鶴作としたいいくつかの作品に対する反論を試みているが『武道伝来記』を含む団水作と断じられた諸作に関しては、森氏が団水常套の方法とした「自害を止める場面」や、前述の団水の慣用句の一部が、森氏が唯一西鶴作と断じた『好色一代男』にも見られるという旨を述べた。これに対し同年十号で森氏は「西鶴本私見―板坂元氏の『西鶴本の問題』を讀みて―」²⁰を発表、さらに翌十一号で板坂氏は「森銃三氏に答える―『西鶴本私見』への私見―」²¹で森氏に対している。また同号には松田修、宗政五十緒両氏共著の形で「読後所見・『西鶴本私見』について」²²

¹⁰ 森銃三「書評・野間光辰氏著『西鶴新攷』」『国語と国文学』二十六卷十二号(至文堂・昭和二十四年)。なお括弧内補足は引用者による。

¹¹ 東明雅「武道伝来記について―森氏の非西鶴説を駁す―」『国語と国文学』二十七卷九号(至文堂・昭和二十五年)。

¹² 森銃三「私の西鶴研究序説」『国語と国文学』二十七卷十一号(至文堂・昭和二十五年)。

¹³ 森銃三「西鶴と西鶴本」(前掲。第四章「西鶴本と団水」および第六章「西鶴本各説(下)」より)。

¹⁴ 板坂元「西鶴本の問題―森銃三氏の説をめぐって―」『文学』二十三卷九号(岩波書店・昭和三十年)。

¹⁵ 森銃三「西鶴本私見―板坂元氏の『西鶴本の問題』を讀みて―」『文学』二十三卷十号(岩波書店・昭和三十年)。

¹⁶ 板坂元「森銃三氏に答える」『文学』二十三卷十一号(岩波書店・昭和三十年)。

¹⁷ 松田修「宗政五十緒「読後所見・西鶴本私見」について」『文学』二十三卷十一号(岩波書店・昭和三十年)。

¹⁸ 神保五弥「近代における西鶴研究」(前掲)。
¹⁹ 森銃三「西鶴と西鶴本」(前掲)。
²⁰ 例として『西鶴を学ぶ人のために』谷協理史・西島孜哉編(世界思想社・平成五年)等を紹介されている。
²¹ 『廣益書籍目録大全 五卷』(元禄五年)「国立国会図書館デジタルコレクシオン」に公開のものを参照。
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2567089?tocOpened=1>

²² 水谷不倒「浮世草子西鶴本」(大正九年初出)『水谷不倒著作集 第六卷』水谷不倒(中央公論社・昭和五十年)所収。

が掲載され、西鶴作是非の問題から少々逸れるものの森氏の直観に過ぎる姿勢を問うた。一方で例えば昭和三十二年『日本古典鑑賞講座 西鶴』において堤精二氏は「事の可否は別として、従来西鶴作とされている諸作品を再吟味する必要は充分あると思われる」²³と問題提起としての意義を評価している。この一連の〈方法の未熟さ〉と〈問題提起の役割〉の両面は現在においても認められる評価となる²⁴。

いずれにせよ森氏の主張自体は受け入れられるに至らなかったが、西鶴作品の作者を問う姿勢は中村幸彦氏の「西鶴工房」説として継承されることとなる。昭和三十二年中村氏の「万の文反古の諸問題」²⁵や金井寅之助氏の「西鶴置土産の版下」²⁶等を経て、昭和四十四年「西鶴入門」²⁷において中村氏は西鶴が編集者である、乃至は助作者が存在するという仮説を明言した。その後中村氏は昭和五十年「編輯者西鶴の一面」²⁸を以て、森氏も触れた「虫明」「唐琴の泊」「牛窓」等の地理的語彙を手掛かりとし「虫明唐琴群」なる諸話に原話の存在を仮定、その提供者として西鷺を挙げた。この中には『武道伝来記』から巻二・三「身軀破る落書の団」が挙げられている。注目すべきは、中村氏は「身体破る落書の団」等において西鶴の脚色を十分に認めており、原話が存在したとしても西鶴作と称することに問題なしとする点である。

西鶴に助作者を認める説は他に金井寅之助氏「約束は雪の朝食」の背景」²⁹や井上敏幸氏「西鶴文学の世界——中国文学とのかわり」³⁰に支持される形で展開する。このうち後者の掲載された『解釈と鑑賞別冊 講座日本文学 西鶴上』には一方で、谷脇理史氏の「出版ジャーナリズムと西鶴」³¹が「工房」説に反する形で掲載されている。材料収集の協力者、咄の提供者の存在は否定できないが、助作者といえるほど大きな存在であったとは言い切れないとし、また、西鶴病中であるとされる時期にその著作の刊行数が少ないのは不

自然だとした。これらを経て、中村氏は平成元年『本朝二十不孝』助作者考」³²によって具体的に助作者部を区分する説を提示した。このように一連の作者考は、それぞれの作品内容は言うまでもなく、出版書誌、ジャーナリズム、創作姿勢、素材探索および脚色と、広範囲、多領域の問題意識を跨いで展開されている。

第三項 作品観・評価

昭和初期から戦前にかけて『武道伝来記』に対する研究の代表的なものとしてまず、片岡良一氏の「西鶴武家物研究」³³が挙げられる。ここで片岡氏は西鶴の武家物作品群を包括的に扱い、その作品観を提示している。『武道伝来記』に対する主なものは善悪一如、男色、複雑な敵討、激しやすくも習俗に縛られる武士を「純写实的」に描いた、とする作品観である。また昭和四年刊『西鶴名作集』³⁴下巻に寄せられた山口氏の作品観は、武勇談ばかりでなく西鶴の興味が「敵討そのものよりも、むしろ敵討前後の事情」に向いているとしており、それゆえに複雑な経緯を伴うとする点、他「敵なるものに對して、憎悪の情を寄せない」とする純客観性、「衆道關係に就いて叙することが多い」とする点は片岡氏と同様である。尤も男色への注目は当時少ないわけではなく、例えば昭和二年刊『井原西鶴集』(国民図書)³⁵や昭和四年刊『井原西鶴集』(日本文学叢書刊行会)³⁶にも同様の視点が示されている。かねての好色本で多様な愛欲を描いて見せただけに女色に比して男色への描写力の低さが際立つとする片岡氏(前掲)や、男色のもつれが敵討の発端となるその軽薄さを指摘する『井原西鶴集』(日本文学叢書刊行会)のように、この男色への注目は主に低評価に繋がる。また純客観的だとする作品観は如上『井原西鶴集』(日本文学叢書刊行会)や昭和十二年『世界文芸大辞典』³⁷にも通底するが、西鶴を所詮武家社会の外側の者として武士への理解の低さを嘆く低評価³⁸と、人間の真相を見事に描破した現実主義的姿勢を讃える高評価³⁹とに二分される。概して好色本及び写実主義を基底にした評価が色濃く全体的には低評価であると言わざるを得ない。

²³ 堤精二「参考文献」 暉峻康隆編『日本古典鑑賞講座第十七巻 西鶴 暉峻康隆編(角川書店・昭和三十二年)。
²⁴ 例として『別冊国文学 No.45 西鶴必携』 谷脇理史編(学燈社・平成元年)「西鶴研究書解説」 藤江峰夫著。
²⁵ 中村幸彦「万の文反古の諸問題」『西鶴 研究と資料』慶應義塾大学国文学研究会(至文堂・昭和三十二年)。
²⁶ 金井寅之助「西鶴置土産の版下」『ビブリア』二十三卷(養徳社・昭和三十七年)。
²⁷ 中村幸彦「西鶴入門」『国文学 解釈と鑑賞』三十四卷十一号(至文堂・昭和四十四年)。
²⁸ 中村幸彦「編集者西鶴の一面」『西鶴論叢』(中央公論社・昭和五十年)。
²⁹ 金井寅之助「約束は雪の朝食」の背景」『西鶴論叢』野間光辰編(中央公論社・昭和五十年)。
³⁰ 井上敏幸「西鶴文学の世界——中国文学とのかわり」松田修 堤精二編『解釈と鑑賞別冊 講座日本文学 西鶴上』(至文堂・昭和五十三年)ここで井上氏は『新可笑記』『万の文反古』『男色大鑑』『懐硯』から計五話を取り上げている。
³¹ 谷脇理史「出版ジャーナリズムと西鶴」松田修 堤精二編『解釈と鑑賞別冊 講座日本文学 西鶴上』(前掲)。
³² 中村幸彦『本朝二十不孝』助作者考』『江戸時代文学誌』八号(柳門舎・平成三年)。
³³ 片岡良一「西鶴武家物研究」『片岡良一著作集 第一』(中央公論社・昭和五十四年 大正十五年初出)。
³⁴ 山口剛「解説」『西鶴名作集 下』日本名著全集刊行会(日本名著全集刊行会・昭和四年)。
³⁵ 笹川臨風「解題」『井原西鶴集』国民図書株式会社編(国民図書株式会社・昭和二年)。
³⁶ 藤村作 形田藤太「解説」『井原西鶴集』日本文学叢書刊行会(日本文学叢書刊行会・昭和四年)。
³⁷ 山崎麓「武道伝来記」『世界文芸大辞典 五』吉江喬松(中央公論社・昭和十二年)。
³⁸ 片岡良一「西鶴武家物研究」(前掲)、藤村作 形田藤太『井原西鶴集』「解題」(前掲)等。
³⁹ 『世界文芸大辞典 五』吉江喬松(中央公論社・昭和十二年)。

この戦前の作品観及び評価を踏襲する形で、戦後暉峻康隆氏は昭和二十三年『西鶴 研究と評論 上』⁴⁰⁾にて『武道伝来記』に触れている。純写実的だとする戦前の読みは、暉峻氏も「非情なまなざし」「説話文学の冷静な精神」として認めているが、一方で「復讐の動機」のみ事実に基づき、「原因・経過その他一さい自由に構想してゐる」としており、脚色により意図的に現実の武家社会の姿を暴露するとした読みは、戦前より一層踏み込んだものである。いわば氏の作品観は敵討という無責任な制度への「暴露」「風刺」「批判」であり、「重量感にとぼしい」としながらも、その中に描かれた人間諸相の多面性を評価している。また一方で前述、森銃三氏に端を発する件の論争も頃を同じくするが、森氏は武家物に対して悉く非難の声をあげており、『武道伝来記』に関しては「筆致に冴えたところがなく、全體の調子が陰氣臭く、重苦しい。全八巻三十二章の内、見るべき章などは一つもない。」⁴¹⁾とまで言及している。ただ森氏は武家物を低く評価することによって、武家物は西鶴作に非ずとする自身の主張の根拠となしていたということを念頭に置かなければならない。

昭和三十年代に入り刊行された『日本古典鑑賞講座十七 西鶴』における暉峻氏の「武道伝来記」⁴²⁾は、戦前の氏の作品観と地続きのものである。ここで特筆すべきは同昭和三十一年、中村幸彦氏「西鶴文学における武家」⁴³⁾における「談奇」「談理」の作品観である。中村氏は戦前から続く武勇談ばかりを扱わないとする「純客観性」と「男色」への注目の二点を基底に、前者に対して「武道倫理に照して、そうならざるを得なかった原因があった」として「天理」に基づく勸善懲惡的な作品構造を読み、後者の「男色」に関しても作者西鶴が「情友の道を様々の支障にもめげずつらぬく衆道の義理を、武士の義理の中でも、代表と認めた」として、義理を貫き通す者としての武士像を読む。また本作を低調とする一要因である、部外者ゆえに武士層への理解力が及ばなかったとする従来の評価に対して中村氏は、武家物諸作品を「万人に共通した倫理を探索しようとした」作品であると位置づけ、そのために武士らしさに欠ける登場人物も混在しているとして反論となした。いわば中村氏の作品観は武士層の中に万人に共通する人間性と万人の「模範」となるべき理想の姿勢の双方を見出すものであり、そのために時に天運をも巻き込

む勸善懲惡的作品構造であるとして、武家物低調説からの復権を試みるものであった。また野間光辰氏は昭和三十四年「西鶴と西鶴以降」において「古今にわたり諸国に跨っている、中には咄の肉づけに盛上りの足りない箇所も指摘されるが、しかし敵討の最後の華々しい場面よりも、敵討の動機、敵を討つまでの過程を丁寧に描いて、討つ人討たれる人の悩みや苦しみに筆を及ぼしている点、人間に対する理解と観察の深さを思わせるものがある。」⁴⁴⁾としており、暉峻氏の如く一部『武道伝来記』に描かれた人間諸相の多様性を評価している。次いで昭和三十五年、中村氏の「談奇」「談理」の作品観を肯定する形で宗政五十緒氏により『武道伝来記』の構造」⁴⁵⁾が発表される。曰く「武士的人間像を通じて、武士の倫理性を語っている」とし、すべてをかけて敵を討つという意味での「絶対状況」を、敵討の経緯において描くことにより豊富な文学的内容を確保したとする。この「絶対状況」が「義理」「考」等の「倫理性」と結合するのが武家物であるとする認識の根底にはやはり、模範としての武士像が色濃く存在する。

このように昭和三十年代は「勸善懲惡」や「模範」といった「談理」としての作品観が本格化する時期であった。昭和四十年代に入るとそれを否定する形で江本裕氏により「西鶴武家物についての一考察——『武道伝来記』と『武家義理物語』との意識をめぐって——」⁴⁶⁾が発表られる。江本氏は典拠との比較により西鶴の脚色の手法を示し、『武道伝来記』において「西鶴は武士を描こうなどとは毛頭考えていなかった」として作品の「談理」の姿勢を否定、代わりに些末な動機が拡大され重層されてとんでもない方向に転がっていくという「談奇」の姿勢をより一層推し進めた解釈をなした。また昭和四十五年、浮橋康彦氏は「武道伝来記と武家義理物語」⁴⁷⁾において作品内の「戯曲的場面構想」を指摘しているが、それは「不信・背信」のモチーフにより敵討に絡む人間関係の意識・関係・存在の不安定さを描き出したとする作品観に根差している。また同昭和四十五年、田川くに子氏は「西鶴の武家物——『男色大鏡』と『武道伝来記』——」⁴⁸⁾において『武道伝来記』に描かれた男色が、敵討や死と結合すること

⁴⁰⁾ 暉峻康隆「西鶴 評論と研究 上」(中央公論社・昭和二十八年)。
⁴¹⁾ 森銃三「西鶴と西鶴本」(前掲)。
⁴²⁾ 暉峻康隆「武道伝来記」暉峻康隆編『日本古典鑑賞講座十七 西鶴』(角川書店・昭和三十一年)。
⁴³⁾ 中村幸彦「西鶴文学における武家」『国文学』一巻六号(学燈社・昭和三十一年)。

⁴⁴⁾ 野間光辰「西鶴と西鶴以降」『岩波講座 日本文学史』第十巻第十五回配本、岩波雄二郎編(岩波書店・昭和三十四年)。
⁴⁵⁾ 宗政五十緒「『武道伝来記』の構造」宗政五十緒「西鶴の研究」(未来社・昭和四十四年 昭和三十五年初出)。
⁴⁶⁾ 江本裕「西鶴武家物についての一考察——『武道伝来記』と『武家義理物語』との意識をめぐって——」『国文学研究』三十四巻 早稲田大学国文学会編(早稲田大学出版部・昭和四十一年)。
⁴⁷⁾ 浮橋康彦「武道伝来記と武家義理物語」『国文学』十五巻十六号学燈社・昭和四十五年)。
⁴⁸⁾ 田川くに子「西鶴の武家物——『男色大鏡』と『武道伝来記』——」『日本文学』十九巻十号(日本文学協会・昭和四十五年)。

によって高い精神性・唯美性を獲得するとし、それを閉鎖的・反社会的な性質を保ったまま自己完結するものと、現実性・普遍性に転化していくものとを前後半で二分し、各章の所収順序と西鶴の創作推移の変遷としての問題に収束させた。同様に創作姿勢の推移という観点から昭和四十六年、浅野晃氏により「西鶴武家物の方法と主題」⁴⁹⁾が発表されたが、従来の「談奇」の姿勢を偶発的な敵討の発端に見出し、それを契機にして展開する人間の宿命的・悲劇的な人生を意識的に引き立たせるためのものと位置づけた点で興味深く、また「談理」の姿勢に関しても作品内に「愛執・我執・意趣・遺恨」等の主題化された人間的な悪が「天理・天命によって滅ぶ」話が散見できるとしている。この他、昭和四十年、西鶴武家物に義理と人情の対立を以て描かれた町民的武士像を讀む松島栄一氏の「西鶴の描いた武士」⁵⁰⁾や、昭和四十三年、戦後の暉峻氏同様武士や社会に対する批判を読む高尾一彦氏の『近世の庶民文化』⁵¹⁾等が刊行され、また前田金五郎氏の典拠考証⁵²⁾が結実したのもこの昭和四十年代である。このように昭和四十年代は様々な方面から多面的に作品が論じられることとなったが、その中で田川氏や浅野氏のように作品全体を見る鳥瞰的な視点から各話の連なりやそこから生じる不統一感に目を向け始めることとなる。また奇しくも昭和三十年代に存在感を示した「勸善懲惡」「模範」等の〈談理〉の作品観を押し返すかのような形で〈談奇〉の作品観が具体性を獲得し始めた時代でもあったといえる。

続く昭和五十年代から昭和末期にかけて、浅野氏同様〈宿命〉〈悲劇〉を作品内に強く読む浮橋氏の「錯綜する運命の記録・武道伝来記」⁵³⁾が発表られる。浮橋氏は「この作品に華々しい敵討美談を期待するのは、かなり見当違い」とする読みの姿勢を提示、その根源を善悪の対立が不完全としている点は、ある種〈勸善懲惡〉的だとする作品観を乗り越えようとするものであり、「複雑な屈折」を示しながら重層化されるストーリーの中で敵同士の当人よりもその周囲の人間が受動的に巻き込まれていく「連鎖的構造」に「武士のならひ」としての〈宿命〉を読む。井口洋氏は雑誌『叙説』に二号をまたぐ形で『武道伝来記』試論―敵討の決断について―⁵⁴⁾「続『武道伝来記』試論―相打ちについて」⁵⁵⁾を寄せ

⁴⁸⁾ 浅野晃「西鶴武家物の方法と主題」『国語と国文学』四十八巻十号(東京大学国語国文学会・昭和四十六年)。
⁴⁹⁾ 松島栄一「西鶴の描いた武士」『国文学』十巻六号(学燈社・昭和四十年)。
⁵⁰⁾ 高尾一彦「近世の庶民文化」(岩波書店・昭和四十三年)。
⁵¹⁾ 前田金五郎「武道伝来記」の事実と創作『文学』三十四巻四号(岩波書店・昭和四十一年)。
⁵²⁾ 浮橋康彦「錯綜する運命の記録」『国文学』二十四巻七号(学燈社・昭和四十四年)。
⁵³⁾ 井口洋「『武道伝来記』試論―敵討の決断について―」及び「続『武

道伝来記』試論―相打ちについて―」(『叙説』(奈良女子大学国語国文学研究室・昭和五十四年)所収。前者は四月号、後者は十月号)。
⁵⁴⁾ 谷脇理史「『武道伝来記』論序説―読みの姿勢をめぐって―」『文学』五十一巻八号(岩波書店・昭和五十八年)。この時期の氏の一連の論考はこの「虚妄の説」とする作品観に裏打ちされる。第二節に詳述。
⁵⁵⁾ 篠原進「『武道伝来記』論―〈悪〉の造型と悲劇的世界の形成―」『弘前学院大学紀要』二十号(弘前学院大学・昭和五十九年)。
⁵⁶⁾ 白倉一由「『武道伝来記』研究序説―創作意図に関連して―」『山梨英和短期大学紀要』十九号(山梨英和短期大学・昭和五十年)。
⁵⁷⁾ 『近世文学研究大事典』(岡本勝・雲英末雄編(桜楓社・昭和六十一年)「武道伝来記」木村由美執筆項。

一感、歪みに触れた諸論への一つの返答ではないかと思われる。

平成に入ると従来行われていた典拠との比較による論考が一層進められることとなる。谷脇理史氏の「一連の論考」⁵⁸は昭和期同様無理に共通点を探し安易に典拠と指摘することに警鐘を鳴らし、典拠とは別に西鶴の創作のよりどころとなる作品を「虚構の種」として具体的に示すものであった。『源氏物語』との二重構造を扱った谷脇氏に対して金栄哲は『武道伝来記』の二重構造——「平家」素材の利用方法から——⁵⁹において『平家物語』に焦点化、「無常の主題を持つ『平家』の話を利用」した「二重構造の中でしか成り立たない」消極的な程度での武士への批判という作品観を提示する。その他西島孜哉氏は「西鶴の創作推移」⁶¹にて中村幸彦氏の「談理」の作品観に立ち返り、「町人社会で解決困難な人間精神の不可解さという命題」に対して「当時の規範的な社会として存在した武家の社会に、規範的な解決を求めざるをえなかった」とするも結果「根本的な武家社会の構造の矛盾に目をやりながら、その解決は不可能な命題として放棄せざるをえなかった」として〈挫折〉の位置づけをなす。矢野公和氏の『武道伝来記』——敵討を凝視する——⁶²は従来の「悲劇」としての作品観に「喜劇」を合わせて視野に収めた論考であり、例えば巻五・二「吟味は奥嶋の袴」において「作者は「メデタシ、メデタシ」と云いながら実はそうした敵討そのものを揶揄していたのであると考えられる」等として、改めて描写された内容に対する西鶴の姿勢を問うものとなった。同様に江本裕氏『武道伝来記』巻四の三「無分別は見越の木登」⁶³も「悲劇性」を高めるための意図を作品内に読むものであり、「情に流されず自己の認識を描き切っているところに、本話の特異性がある」として作者の姿勢に言及している。この他『別冊国文学 No.45 西鶴必携』所収、西島孜哉氏による「西鶴文学総覧」は「形骸化し矛盾した武士道に苦しむ武士を多く描いており、武士の人間としてのあり方を描いたものとして高く評価できる」⁶⁴と紹介する。

平成十二年、『新編日本古典文学全集』⁶⁵解説において広嶋進氏は従来の「談理」「人間臭い」といった指摘を踏まえ「西鶴は複雑な事件の推移を傍観的に描く中にも、武士の義理と一分というものの矛盾をあらわにしており、その紙背には、人間の性情を重んじる気持ちがあるように思われる。」としている。世紀末に始まる佐々木昭夫氏の一連の『武道伝来記』論⁶⁶は『東京家政学院筑波女子大学紀要』に六回にわたって寄せられ氏の考察が「話ごと」になされた大規模なものであるが、改めて作品単位での視点から各話の多様性を示して見せ、所収順にまで言及している点非常に意義深いものである。岡本隆雄氏『武道伝来記』の演劇性——趣向と人物類型を中心に——⁶⁷は『武道伝来記』に歌舞伎という「世界」と「趣向」のような構成の反復を見出すものであり、「西鶴が『武道伝来記』で描こうとしたことは、どのような読み方をしても、同じような結論を得られるだろう。」として各話の主題を画一的に読もうとした点で特徴的である。大久保順子氏は「出頭」をめぐる表現——西鶴武家物と「談理」の性質に関して——⁶⁸において「出頭」に関して語り手と読者の双方の批判的認識を峻別して論じた。この他平成十四年、大久保順子氏『武道伝来記』「大蛇も世に有人が見た様」小考」⁶⁹や平成十七年、染谷智幸氏『武道伝来記』巻五の三「不断心懸の早馬」⁷⁰等、概略としては各編への論考をそれぞれに深めていくのが近年の『武道伝来記』研究の主流となる。

第二節 伝聞表現に関する先行論

次に本論の切り口となる伝聞表現についての言及を整理しておきたい。といっても、『武道伝来記』研究において伝聞表現に触れるものは決して多いとは言えない。その要因のひとつとして、前節で確認したような「談理」や「奇談」などの説話的な作品認識の強さが伝聞表現を説話文学の影響として自明のこととして含み込み、結果伝聞表現単体を検証の対象としてこなかったことが予想される。ここでは伝聞表現に関して説話文学の影響以上の解釈を積極的に展開していった谷脇理史氏、

⁵⁸ 谷脇理史「西鶴作品における典拠の問題(上)——『武道伝来記』を中心に——」及び「西鶴作品における典拠の問題(下)——『武道伝来記』を中心に——」『早稲田大学大学院文学研究科紀要文学・芸術学』所収。前者は平成三年三十六号、後者は平成四年三十七号。
⁵⁹ 金栄哲『武道伝来記』の二重構造——「平家」素材の利用方法から——『筑波大学平家部会論集』五号筑波大学平家部会・平成七年。
⁶⁰ 西島孜哉「西鶴の創作推移」谷脇理史 西島孜哉編『西鶴を学ぶ人のために』(世界思想社・平成五年)。
⁶¹ 矢野公和『武道伝来記』——敵討を凝視する——『国文学』五十八巻八号(至文堂・平成五年)。
⁶² 江本裕『武道伝来記』巻四の三「無分別は見越の木登」谷脇理史編『別冊国文学 No.45 西鶴必携』(学燈社・平成五年)所収。
⁶³ 西島孜哉「西鶴文学総覧」谷脇理史編『別冊国文学 No.45 西鶴必携』(前掲)。

⁶⁴ 『新編日本古典文学全集六十九 井原西鶴④』富士昭雄・広嶋進校注訳(小学館・平成十二年)。
⁶⁵ 佐々木昭夫「『武道伝来記』論」巻一の構成『東京家政学院筑波女子大学紀要』二巻(東京家政学院筑波女子大学紀要委員会・平成十年)等。なお一連の論考は氏の『近世小説を読む 西鶴と秋成』(翰林書房・平成二十六年)第三章に所収される。
⁶⁶ 岡本隆雄『武道伝来記』の演劇性——趣向と人物類型を中心に——『群馬県立女子大学国文学研究』二十七巻(群馬県立女子大学国語国文学学会・平成十九年)。
⁶⁷ 大久保順子「出頭」をめぐる表現——西鶴武家物と「談理」の性質に関して——『香椎潟』五十八号(福岡女子大学国文学会・平成二十四年)。
⁶⁸ 大久保順子「『武道伝来記』「大蛇も世に有人が見た様」小考」『文藝と思想』六十六号(福岡女子大学文学部紀要・平成十四年)。
⁶⁹ 染谷智幸「『武道伝来記』巻五の三「不断心懸の早馬」」木越治編『国文学解釈と鑑賞別冊 西鶴 挑発するテキスト』(至文堂・平成十七年)。

『武道伝来記』とその他の西鶴作品との伝聞表現の差異について指摘した杉本つとむ氏の論考を、周辺の問題にも触れながら確認したい。

第一項 谷脇理史氏による見解

谷脇氏は『武道伝来記』における伝聞表現について、昭和五十年代に氏が積極的に展開していった「カムフラージュ」説の枠組みのなかで触れている。そのためまずはこの「カムフラージュ」説について整理したい。谷脇氏が「カムフラージュ」という観点から『武道伝来記』について論じたものとして、主に以下の十の論文・解説文が挙げられる。

- ①『武道伝来記』の再評価―「虚妄の説」の説―（昭和五十七年）
- ②『武道伝来記』論序説―読みの姿勢をめぐって―（昭和五十八年）
- ③『武道伝来記』の一面―武家への視線―（昭和五十九年）
- ④岩波書店『新編日本古典文学大系』校注・解説（平成元年）
- ⑤『武道伝来記』における諷刺の方法―その一側面―（平成二年）
- ⑥「西鶴作品における典拠の問題（上）」『武道伝来記』を中心に―（平成三年）
- ⑦「西鶴作品における転居の問題（下）」『武道伝来記』を中心に―（平成四年）
- ⑧『武道伝来記』の読者の問題―その諷諭を受けとめる者―（平成五年）
- ⑨「自主規制とカムフラージュ―『男色大鑑』と『武道伝来記』の差異―」（平成十一年）
- ⑩「西鶴の自主規制とカムフラージュ―『武道伝来記』の戦略―」（平成十二年）

①において谷脇氏は、作品の時代設定と実際に描写されている時代（主に一の三、五の一、五の四）との間に作家的なズレがあると指摘し、江戸中期、椋梨一雪が『日本武士鑑』序文において『武道伝来記』を「虚妄の説」と批判したことを逆手に取り、以下のように言及している。

以上で明らかなように、『武道伝来記』の西鶴は、モデルとした敵討を事実として書くとはしていない。むしろ、仮にモデルの事件を導入していても、それをもとのままにとり入れようとせず解体して利用し、意識的に時代をぼ

かしたり時代をずらしたりしているのである。いわば、「一として実なること」のない「虚妄の説」を意識的に作りあげようとしているのである。したがって、『武道伝来記』が「虚妄の説」だという一雪の断定は、あくまでも正しい。が、問題なのは、何故あえて「虚妄の説」を書いたのか、それがどんな意味を持ったのか、ということである。

この段階で「カムフラージュ」という言葉は使用されていないが、右の観点は後年「カムフラージュ」と位置づけられる内容と大きく重なる。

この『武道伝来記』を虚構の作品として解釈する観点を引き継ぎ、前田金五郎氏を中心とする従来の典拠考証の限界を指摘する形で谷脇は「カムフラージュ」の範囲を「時代」①から拡大させていく。

『武道伝来記』の西鶴は、当世の武家社会を当世のこととして書く事は**はばかり**、**時・所・人名を仮構し**、**事実にもとづく場合でも**、それを自在に組み替え、創作を加え、**意図的に虚構化**している。②・傍点・谷脇

その根拠として、確実に巻八の一・巻七の二の典拠と認められる「寛文十二年二月三日、浄瑠璃坂の奥平源八らの敵討」が作中では場所・人名を「意図的に変え」て作中に用いられていることを指摘した。

では谷脇氏は、一体なんのために「カムフラージュ」を度々繰り返す必要があったと考えるのか。「実を書くことへの何らかのはばかり」①とは一体なにか。以下関連する箇所を引用する。

（ア）この話（五の四）が、「御代静謐に治」った当世（一六七、八〇年代・谷脇）の腰抜け武士のありようを滑稽に描いていることは言うまでもないが、ここでの「天正三年…」の時代設定は、単に当世の武士気質を当世のこととして諷することを**はばかり**て行われているだけであるまい。貞享二年頃から発令され始め、貞享四年にほぼ整備される生類憐れみの令も当然意識されているとみるべきであろう。…貞享四年四月刊の『武道伝来記』に、大を突き殺す話が、当世の腰抜け武士を諷する話として出るのは、いかにしても具合の悪い状況である。①・傍点・谷脇

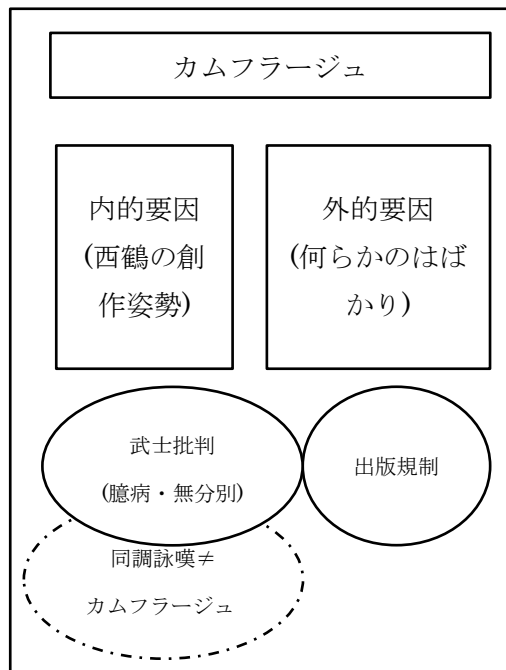
（イ）…西鶴自身の『一代男』以来の創作方法自身も「虚妄

の説」を意識的に書く上で関わりを持っていると見られる。：『武道伝来記』で西鶴が「虚妄の説」を意識的に書く理由は、出版取締りなどの外部的状況の規制と同時に、西鶴の創作方法自体が本来実のみを志向していない点にも求めることが出来るであろう。(①・傍点・谷脇)

(ウ)ところで、『伝来記』の中に、どの程度武家のありようを諷する意図があるかと思われべきかは、実は、思いの外、難しい問題であるように思われる。というのは、西鶴の書き方が一見登場人物の行為や心情に同情的であつても、見方によればそれをカムフラージュと考えることもできるから、『伝来記』の各章すべてに、風刺の意図の存在を指摘できないこともないように見えるからである。：私にとつても、同調し詠嘆しているのはカムフラージュではないか、という読み方は、確かに魅力的である。ただ、『伝来記』の中には、後述のように、これまでのような同調や詠嘆を記さず、武家の愚行を文字通り諷していると思われる部分も少なくないようである。

(③)

これを次のように図示することができる。



〈図一〉谷脇理史「カムフラージュ」説

引用(ウ)における記述が、『武道伝来記』についての一連の論考における「カムフラージュ」という用語の初出であるが、ここで谷脇氏は作者の同調や詠嘆の姿勢を「カムフラージュ」として解釈することに慎重である。しかし後に谷脇は「御松久かたの雲に、よろこびの舞鶴」と松平(徳川)氏の太平長久を寿ぎ、それを喜ぶ西鶴という寿詞は、序などの常套とはいえ、どこまで本心なのか。」と序文における作者の姿勢を疑問視し、「やはりここにもカムフラージュの姿勢を見るべき

であろう(『伝来記』の冒頭と末尾の一文その他でも徳川氏への寿詞を書くといった念入りなやり方を行っていることを含めて、この点を強調することは容易である)。(④)と結論づけている。作者の姿勢に「カムフラージュ」の有無をみるか否かはややもすれば恣意的にならざるをえず、谷脇氏がどういった線引きのもとでその都度の作家の姿勢を「カムフラージュ」として扱い、あるいは本心として扱っていたのかを探ることは難しい。

これは引用(ア)(ウ)に見られるように、「カムフラージュ」説が、『武道伝来記』における批判精神と強く結び付けられて展開されることに関連している。前節で触れたが『武道伝来記』に積極的に武士批判を読む姿勢を見せたのは高尾一彦氏であり、谷脇氏は彼を引き合いに武士を「奇矯で不可思議な、格別のものとして描いているとは思ふ。が、それを諷する意図を自覚しつつ書いているとまでは見る必要はないように思う。」(③)としている。また西鶴作品全体における「カムフラージュ」を指摘した「西鶴のカムフラージュと諷論」(平成十三年)では、高尾氏以前に西鶴作品に批判精神を指摘していった野間光辰氏について触れ、「野間氏のいう程には強烈でなく、庶民レベルでの面白からぬ感情の域を出ておらず、その時々「天下」についての噂に反応している程度と見るべきなのではないだろうか」としている。

本論文における谷脇の言辞を引用しつつ、杉本好伸氏は次のように言及している。

「戦略」をたくみに立てる「隠居親父」の、繰り返しておこなわれる、したたかな営為は、第三者にはすでに立派な〈批判〉そのものにも映ってこようし、そうとなれば、野間氏の見解と、結果としてどれほどの差異があるものなのか、このあたりがどうも不鮮明に残ってしまうのである。今後、谷脇理史氏の〈諷論〉説が詳細に整備されることになるだろうが、その際には野間光辰氏との相違をふくめ、このあたりの問題にたいしていつその検討が必要となってくるかどうか。」¹⁾

このように、そもそも批判精神に対する氏の論考が「第三者」に「不明瞭」であるならば、その延長線上にある「カムフラージュ」の対象がやや曖昧となるのは当然であるといえよう。これらには高尾氏や野間氏の論考を意識し差別化をはかるうとする姿勢が伺われる。確かにそうした計らいが必要なほど、『武道伝来記』における批判精神の読みは、表面的

¹⁾ 杉本好伸「西鶴(武家)批判の視座」谷脇理史・広嶋進 編『西鶴を樂しむ別巻2 新視点による西鶴への誘い』(清文堂・平成二十三年)。

にはやり尽くされてしまい、膠着状態にあるといった印象を受ける。

だが一方で杉本氏は「近世文学に当世の政治にたいする〈批判〉や社会のありようにたいする〈批判〉」の存在をみとめること自体、疑問視するというのが、どうやら今日の平均的な見解のようである。」と批判精神をめぐる近年の研究動向について触れている。これはおそらく中嶋隆氏の次のような指摘と関連するだろう。

西鶴の教訓や現実認識は、作品や話が異なると矛盾する例が多い。前章で述べたように、執筆時期にそって西鶴の現実認識の変遷を跡づける作家論的方法が、西鶴研究の主流をしめてきた。しかし、はなし手 *narrator* に作中人物の視点が重層していることが認められるのなら、教訓的片言隻句をそのまま西鶴の階級意識や現実認識とするような、研究の前提が問題となる。⁷²

ここでは「教訓」や「現実認識」という言葉が用いられているが、ここに批判精神が含まれると考えて問題ないだろう。さてこのような立場を踏まえると、「侍畜生」という言葉が西鶴武家物作品に散見することを主な根拠として『武道伝来記』に武士批判を読んでいた高尾氏の主張は再考を要することになる。すなわち、語り手の認識と登場人物との認識の「重層関係」を前提にすれば、「侍畜生」と頻りに武士への批判をあらわにするその主体を作者西鶴と言いつけることが難しくなるということである。そしてそれは高尾氏のみならず、谷脇氏の論考にも当てはまる。

…ともあれ町人の立場から見れば、あまり付き合いたい相手とはいえない武士たちが多い。しかし、武士に支配され、同時にそれを顧客として生きて行かなければならないのが当時の町人たちである。武士の論理や心情のありようをうかがい知る必要のある町人読者にとって、『伝来記』は、当世の武家のありようを面白く手っ取り早くうかがうすぐれた参考書でもあるかのように、武家の人情・世態・風俗を種々の局面からえぐり出して行っているのである。『武道伝来記』が、当世を生きた武士を同時代の町人の目でとらえ、浮世の一面を読者に認識させる作品であることは、ほぼ明らかとなる。^③

この引用部分に谷脇氏の、武士対町人という二項対立的把握

握が強く表出している。批判の対象はあくまで武士であり、批判の主体は語り手ではなく作者西鶴、それも町人の代表としての西鶴であり、武士批判を「面白く手っ取り早く」「うかがい知る」のは町人である（この受け手の問題は後に⑧において読者論の問題として展開される）。こうした把握のもとで展開される次のような指摘は再考を要するだろう。

（二）右が巻二の二の前半部だが、軍平の行為は、武士らしからぬ「無分別」なものとして描かれ、同時に、妙春の言葉を介して、当世の武士の婚姻の風潮が諷されていると見られるであろう。さらに後半部でも軍平は、「臆病風に引籠」る卑怯な武士として描かれる。^③

（オ）また、このような時代設定（五の四）を行う理由としては、臆病武士を滑稽に描きあげて諷し、「犬には生くら物よし」などという穏やかならざる世間の風評を平然と記したりする場合、あらわに当世のこととして書く事をはばかる必要があったのではないかということも理由の一つとして推定できる。（④・傍点・谷脇）

（カ）（二）（四の三冒頭）では、「出頭に暇な」新参者、三年の間に急速に出世した大壁源五左衛門が紹介されるとともに、その出世の原因が、武道によるものではなく、経済官僚型の能吏としての才覚によるものであることが明らかにされ、当世の武士の一面、と同時に当世における武家社会のあり方の変質ぶりが強烈に批判される。

⑤

（エ）において批判の対象とされているのは武士である「軍平」および「武士の婚姻の風潮」であるが、後者に関しては谷脇氏も示しているように「妙春」という仲人の言葉を介している。（オ）における「犬には生くら物よし」という「穏やかならざる」批判の言辞はまさしく「世間の風評」であって西鶴の認識と即座に結びつけることができない。（カ）についても同様である。

肥後のむかしの國の守なる御城構の外新造作の門櫓長屋作り美々敷立ならびたるはどなたの屋敷と尋ねければ。是は彼出頭に暇なき大壁源五左衛門といふ新参者。纔廿五石より三年の中に貳千石とりあげたる者の拝領の地なり。今時は武道はしらひでも十露盤を置ならひ始末の二字を名乗れば何処でも知行の種となりて譜代の筋目正敷者は

かならず先知を減少せらる。世は色々にかはりて今より末々は諸侍たる者刀の代に秤を腰にさして商ひはやるへとさたする時。〔『武道伝来記』四の三〕

傍線部が示すように、これは語り手による「出頭に暇なき大壁源五左衛門」への直接的な批判ではなく、彼を批判する周辺人物による対話によって示される批判である。これについては大久保順子氏が詳細に検討を加えている。大久保氏は当時の「出頭」という詞の換喩的なイメージ、つまり「出頭」批判の認識の「型」を指摘し、その「型」が「巻四の三の場合」はむしろ、より複雑な状況の事件展開を加味しつつ、少しずつ変質させているようにすらみえる」としたうえで、本話を次のようにまとめている。

巻四の三のように、一見地の文のように開始され配置された「認識の〈型〉」としての言辞に、「と尋ねければ」「とさたする時」が「付け」られることで「誰か」の批判」という意味が発生する場合、その配置と構成によって、それが時には「論評する作中人物」の側の感情の切実さの表現ともなりうるのである。¹³

たしかに、ここまで確認した谷脇氏の一連の論考はすこぶる示唆に富み、参考になる点が多い。しかし、語り手が作中人物と「重層関係」にあることを念頭に、さらに語り手と西鶴とを厳しく峻別する現代の慎重な動向を踏まえると、引用(エ)(オ)(カ)等一部再考を要することは明らかである。それはともかく、これらのような谷脇氏の一連の「カムフラージュ」説の中で触れられるのが本論の切り口となる伝聞表現である。谷脇氏による言及は①の文末脚注においてすでになされている。

注1「むかし」とするものがもっとも多く、十一章。さらに「ふるきみかし」とするもの一章。「昔日」は二章、「以前」「過し比」「古往」各一章など。また「むかし」などの言葉は出さないが、「……語り伝へて」等により「むかし」であることを示す章も多い。『武道伝来記』の時代設定の具体的なデータやそれぞれの解釈、本文との対応関係などについては、本稿の制限枚数の関係で、別の稿にゆずりたい。①

内容からも明らかだが、これは「カムフラージュ」説のな

かでも時間設定について論じたものに付随する。つまり伝聞表現「……かたり伝へし」は「むかし」「以前」等と同様、各話かはるか昔のことであって現在(当時)の話ではないという虚構の時間設定を補強する「カムフラージュ」の記号として処理されている。後に『武道伝来記』全体にわたっての細かな指摘が校注としてなされている④。以下の七例がそれにあたる。

・「其はたらき聞伝て」(序)と同じく、はるか昔のことと時代設定するための結び。他にも多い。(一の一・「かたりつたへし」注)

・本章が「昔」の話であることを示すが、「今の世までも語り伝へ」という言い方に、注一八のアイロニーの視点を感得できる。(一の四・「今の世までも語り伝へぬ」注)

・昔の事を現在に。当世のことならずと強調。(二の一・「昔を今に語り伝へり」注)

・冒頭部に対応し、当代の武家への直接的な批判とうけとられぬための時代設定。(四の三・「かたりつたへてあはれなり」注)

・冒頭「昔日」に照応。当世ならずを強調。(五の二・「今にかたりつたへて、聞さへあはれなり。」注)

・冒頭部の「過し比」に照応。上意討ちより生まれた悲劇が、当世の特定の間と受けとられることへのカムフラージュ。(六の四・「聞さへ哀はつきず。」注)

・「老の首」から年を重ねた老人を出し、その老人が「むかし語り」に聞いた話、という時代設定で、昔のことであることを強調。(八の四・「むかし語りに聞しは」注)

これらを見る限りではやはり谷脇氏が「語り伝へし」等の伝聞表現を主に時代設定としてみなしていたことが伺えるが、一の一の四にのみ踏み込んだ解釈がなされている。谷脇氏は一の四「内儀の利発は替た姿」をはじめとする四話を挙げて『武道伝来記』に「当世の武家の人間関係に、新・旧の対立・反目がある」とし、「一つとして見事に敵討を成就したものはなし」ことを理由に「西鶴が旧派の武士に同調しようとする姿勢をもっている」と見てもいいようであり、西鶴は、非町人的な、自らの世界とは格別な武家のあり方に武士らしさを認めているようである。」としている③。右に挙げた校注における「アイロニー」とはすなわち、その旧派の武士をよしとする価値観が「今の世までも語り伝へ」られ許容されることとが当世の武士たちへの皮肉につながる、とする主張である。

¹³ 大久保順子「出頭」をめぐる表現―西鶴武家物と「談理」の性質に關して― 福岡女子大学国文学会『香椎鴻』五十八号(平成二十四年)。

これを批判精神への「カムフラージュ」それ自体が「アイロニー」となるという両義性への指摘であると取るならば、新たな伝聞表現への解釈の可能性を示唆しており興味深い。しかしその対象が武士であるとするならば、「カムフラージュ」と「アイロニー」は対象を同じくし、相殺関係になりかねないことを念頭におかなければならない。

第二項 杉本つとむ氏の見解

次に杉本つとむ氏の言及について確認したい。氏は『古典文学全集 40 井原西鶴 三』(小学館・昭和四十七年)所収の「西鶴作品におけることばのスタイル―共感の散文芸術―」(A)およびそれをもとに改稿した『井原西鶴と日本語の世界―ことばの浮世絵師―』(彩流社・平成二十四年)第二章「西鶴、新文章の創始と方法」(B)において、西鶴作品における伝聞表現について触れている。以下適宜両者の対応ヶ所を比較しつつその言及をまとめた。

杉本氏は「形式のうちにひそむもの」(A)「一定の表現形式のうちにひそむ効果」(B)として「となり(とかや・とぞ)」を切り口に『西鶴諸国はなし』の文体について次のように指摘している。

・五巻三十五話中六話がトナリ、他にトカヤ・トゾを加えて、三分の一はトナリ調といってよい。その他の「……と里人の語りし／……申伝へし／……と語りぬ／……語りし」などを加えると、まさしくトナリの文体・精神でつらぬかれているといえる。(A)

・中世の説話を意識して書いたという『西鶴諸国はなし』は、五巻三十五話中、六話が〈となり〉、他に〈とかや・とぞ〉を加えて、三分の一はこうした〈となり〉体、伝聞のそれといってよい。その他の〈……と里人の語りし／……申伝へし／……と語りぬ／……と語りし〉などを加えると、まさしく〈となり〉の文態、説話の語り口そのものといえる。伝聞であり民衆への語りかけと同時に、伝承の推進という己れの立場の自覚と精神であろう。(B)

無論両者に「伝聞」という言葉が用いられているが、それぞれを比較すると後者の方がより「伝聞」であることを強調し、踏み込んだ解釈を示しているように感じる。杉本氏はこの文体について『宇治拾遺物語』『今昔物語』等の「和文脈の投影」が著しいとしつつも、「中世以来の説話体とくつついて離れている近世の西鶴の文体」(A)「中世以来の説話体

と密着しつつも、適当に距離をもつ近世の西鶴の文態」(B)があるとして西鶴が意図的にこの形態を使用していると指摘している。その意図について杉本氏の見解に触れる前に、『武道伝来記』への言及を先にまとめておきたい。本節冒頭でも触れたとおり、杉本氏は『武道伝来記』における文体が他の西鶴作品とはやや異なる特徴を持つことを指摘している。その指摘自体は早くからすでに「同じ武家物とはいえ、『武道伝来記』は、「……と語り伝へし」であって、トナリは二話にすぎないが、両者の比較は紙数の関係で割愛する。」(A)となされているが、Bではこれにやや付け加える形で次のように言及している。

同じ武家物とはいえ、『武道伝来記』は、〈……と語り伝へし〉であって、〈となり〉は二話にすぎない。むしろ伝聞から離れている。〈序〉に、〈筆のはやし詞の山、心のうみ静かに御松久かたの雲によるこびの舞鶴……〉といい、現実の〈諸国敵討〉(副題)を真正面にすえての武士の道、非常なる世界の創作である。文字どおり両者は同じ作家の同じ発想の異形といえよう。この両者の比較は他日を期して割愛する。(B)

おそらく「伝聞から離れている」とする解釈は後半の「創作」という作品観に起因するものだろう。杉本氏は序文をもとに『武道伝来記』が伝聞体を装いつつ創作であることを示していると読む。この解釈は谷脇氏の「……聞伝て、筆のはやし詞の山」は、事実の正確な見聞ではなく、修辞を盛大に用いていることを強調する部分だが、これは、その作品が事実通りのものではなく、縦横に虚構が交えられていることを宣するものであったと見てよいであろう。」(④)とする指摘に通じるものであるが、そうであるならば、「伝聞から離れている」とする指摘は「事実の正確な見聞ではな」いとする谷脇氏の主張と照応する部分であろうか。

それを探るには西鶴作品の伝聞表現の意図について、杉本氏の見解を踏まえておく必要があるだろう。右に引用した「民衆への語りかけ」「伝承の推進」を含め、杉本氏はBにおいてより具体的にその役割について示している。

(ギ)確かに〈となり〉は人づてであって伝聞であるが、また客観的な記述でもある。しかも両者を越えて、そこに作家の主体的意図、ことばの形式を越え時代を直視する冷静な独自の表現世界、文学そのものがある。(A 六十三頁)

(ク)町人物にある〈となり〉は、擬客観的記述の典型でその表現のうしろを読みとるべきである。いうならば決して伝聞などではないのである。『日本永代蔵』でも、〈此氣大分仕出四家さかへしとなり〉などとみえる。場面・時代設定にも関連があるが、単なる伝聞ではなく、副題のとり、〈大福新長者教〉なのである。より積極的に教訓のスタイルに転化していることも見のがすべきではない。また内容が同時代でないことも自ずと語っている。(A)

(ケ)したがって時に、〈…ぞかし〉と肯定し、時に〈と也〉と伝聞の姿勢をとり、また〈……と其里人の語りぬ／…ある人の語りし〉などと客観性を強調して結んでいる。しかし西鶴の作品の中では内部の燃焼とか、文学精神の烈しさという点では、他の作品と次元を異にし、この作品は既存の安全舞台で楽しみ、〈咄〉を語るストーリーテラーのそれである。(A)

主に杉本氏の伝聞表現についての解釈とみなすことのできる部分に傍線部を付した。ここから、杉本氏は伝聞表現に多面的な機能を読み取っていたことが理解できる。無論作品ごとの解釈を示す部分も含まれているため、それを西鶴作品全般に普遍的に適用できると即座にみなすことはできないが、大まかな方向性を掴むことは可能だろう。杉本氏がもつとも強調するのは「擬客観」性であるが、(キ)における「時代を直視」といった言及と合わせて事実に基づく内容の伝聞を指し示していることと確認できる。一方で(キ)には「人づて」であるということが「客観的な記述」と対極的に示されていることからその不確実性を指しているといえ、この両面が伝聞表現の基本的な機能であると捉えられる。興味深いのは(ケ)における「……と其里人の語りぬ／……ある人の語りし」などと客観性を強調して結んでいる」とする記述であり、ここから杉本氏が〈…語り伝へし〉系統の伝聞表現により「客観性」を有していると認識していたことが予想される。

ここから『武道伝来記』に関する言及を振り返ると、〈…となり〉系統に比して〈…語り伝へし〉系の伝聞表現を多用する本作は客観性がより高いはずであるため、やはり「むしろ伝聞から離れている」とわざわざ断りを入れているのは、谷脇氏のいう「事実の正確な見聞ではない」と同様、伝聞の事実性から離れた虚構性を杉本氏も指摘しているといえる。また(ク)における「内容が同時代でないことも自ずと語っ

ている」とする指摘も、伝聞表現を時代設定の補強として「カムフラージュ」説の一部として処理する谷脇氏の見解と低通する。

第三節 問題の所在及び仮説

第一項 問題の所在

第一節において『武道伝来記』について論じたものの目的を絞りその研究史を簡潔にまとめた。研究史を概観して明らかに通り、専ら全集に所収される形で世に出ることとなる『武道伝来記』は、西鶴作品の一つ、という極めて存在感の希薄な認識から始まる。また片岡氏、暉峻氏、森氏ら比較的発言力を持つ諸氏によつて〈低調〉であると位置づけられた点も惜しい。その主たる原因は、武勇伝ばかりを扱わない採録姿勢が、「高名の敵うち」を伝えるとする序文との齟齬を来すとする点であり、部外者たる西鶴には所詮武家の世界を看破することは不可能だったとする評価に速やかに連結しているように思う。中村氏に代表する〈談理〉の作品観はこうした「武家物低調説」を覆す一つの方法であった。すなわち武家物への一つの評価として〈談理〉〈勸善懲惡〉〈模範〉等の文芸理念を読むに至ったといえる。〈談理〉の作品観が比較的早熟であったのに対し〈談奇〉の作品観はやや遅れて具体性を獲得するに至る。昭和四十年代の江本氏、浅野氏らの論考がその萌芽を担うが、第二節で確認した谷脇氏の論考も一部この延長線上に位置するだろう。また谷脇氏の一連のカムフラージュ論が、武士批判の視座と密接に展開されたことも前節で確認したとおりである。

第二節においては谷脇氏、杉本氏両者の、『武道伝来記』における伝聞表現について確認した。その結果、両者とも序文「筆のはやし詞の山」の部分に『武道伝来記』の創作性・虚構性を読み、事実の伝聞を装いつつもそれがまったくのポーズであるとする基本的な立場の共通性が認められ、ともに説話の影響以上の解釈を積極的に示していることが確認できた。そのうえで谷脇氏は自身の「カムフラージュ」説の中で、虚構の時代設定を補強する記号として「むかし」「昔日」等と同列に処理していることが確認できたが、杉本氏もこれと同様の見解を一部示している。杉本氏の特長的な点はやはり『武道伝来記』における伝聞表現を「…語り伝へし」として他の西鶴作品と区別した点にある。

さて谷脇氏も言及していた〈武士批判〉をはじめとして、初期の〈武家物低調説〉やその後の〈模範〉等を含め、研究史に残る主要なトピックの大部分にある共通の認識が伺われることに気づかされる。それは二節でも触れたが、町人で

ある西鶴と描写対象である武士との膠着的二項対立の図式である。「はなし手 narrator に作中人物の視点が重層している」とした中嶋氏の指摘は、語り手と西鶴との「無限定な」連結への再考を促すきっかけとなった。だがこの視点から西鶴の武家物作品を考える時、無限定に繋がられてきたのは語る者と西鶴ばかりでなく、語られる者と武家をも含みこむ。今日西鶴の武家物と対峙する時、この強固な武士対町人という前提のイデオロギーを一度後破産にして細部を検討していく必要があるのではないか。

これをもとに、先行論の確認から得た筆者の問題意識を確認しておきたい。「諸国に高名の敵うちそのはたらき聞伝て」(序)における伝聞表現には賞賛の姿勢が感得でき、谷脇氏が主張する時代設定の補強以上に複雑な機能が予想される。その理由の一つは二節で触れた谷脇氏の「アイロニー」の主張に関連する。氏の基本的な主張としてカムフラージュの対象となるのは主に時間・人名・場所であつたが、一部語り手の姿勢にもカムフラージュが及ぶとする解釈をなしていた。それが序文等に示された当世の徳川の治世への寿ぎであり、これ自体に疑問が有るわけではない。問題は序文のように、カムフラージュの対象、すなわち伝聞される過去のはばかられるべき内容に対しても賞賛の姿勢が感得出来てしまう場合、以下のような二重の相反するカムフラージュが生じてしまう。一つはその話が武士を批判する等のはばかられるべき内容だがそれは昔の話である、とする時間的カムフラージュ、もう一つはその話が決してはばかられるべき内容ではなく賞賛されるべき内容であるとする語り手の姿勢に関するカムフラージュであり、これは対象を同じくするとき、一方が他方を相殺する関係にある。もうひとつの理由は中嶋氏の指摘する「重層関係」の認識が谷脇の論考に欠落している点であり、武士対町人とする氏の、あるいはこれまでの前提認識の正当性が危うくなるのであれば、伝聞表現の機能が単なる時代設定のカムフラージュ以上に複雑化することが予想されるのである。その機能を考察していく際に『武道伝来記』にける伝聞表現の異質性に関する杉本氏の指摘は示唆的だが、氏の言及は僅かにとどまり、具体的にどれほど異なるのかを今一度検証し直していく必要がある。

第二項 仮説

『武道伝来記』における伝聞表現の機能を考察していくにあたって仮説を立てておきたい。その際注目したのが同じ西鶴の手による武家物浮世草子『武家義理物語』(貞享五年)に所収される「発明は瓢箪より出る」(巻三の一)における以下の記述である。

近代は武士の身持。心のおさめやう。格別に替れり。むかしは勇をもつばらにして。命をかるく。すこしの鞘とがめなどいひつりの。無用の喧嘩を取むすび。其場にて打たし。或は相手を切ふせ。首尾よく立ちのくを。侍の本意のやうに沙汰せしが。是ひとつと道ならず。

この記述を言葉通りに捉えれば、「道ならず」とする言葉から明らかな通り、語り手の批判精神が示されていると解釈することができる。問題はその対象である。語り手はここで「命をかるく」する「むかし」の武士のみならず、それを「侍の本意のやうに沙汰」することをも槍玉にあげている。つまりここに現れているのは単純な武士批判ではなく、武士と、それをもてはやす世間への二重の批判であると捉えることができる。これはいわば的外れな賞賛自体が批判の対象となりうることを示しているのである。ここで『武道伝来記』にもどって序文の語り手の言葉を確認したい。『武道伝来記』序文における語り手が「諸国に高名の敵うち其はたらき聞伝て」と賞賛の姿勢を取っている点はこれまで何度か繰り返してきた。また早くから山口剛氏により「諸国に高名の敵討、其はたらき聞傳え云々とあるも、作者の筆は、其後の敵討物に必ず伴ふやうな武勇談に専らでない」と指摘の備わるように、この賞賛が決定的を得ていないことも見逃せない。谷脇氏の示したようなカムフラージュの中では、武士批判と武士賞賛の相反する力関係が働いてしまうことは前述のとおりである。そしてそれは批判と賞賛の対象が同一のもの、つまり武士に向けられていると解釈するために生じる。ここから『武道伝来記』の序文には、的外れに「侍の本意のやうに沙汰」する世間と同調することで「命をかるく」する「むかし」の武士を諷刺する語り手の、いわばポーズが示されているという仮説をたてた。これをもとに考えると『武道伝来記』における語り手は、武士はもちろんのこと、武士を手放しに賞賛する世間をも批判の対象としていると捉えることができる。そこで示される伝聞表現はいわば伝聞される内容のみならず、その評価までもともに伝聞してしまう装置として働いているのではないか。

第二章 検証

ここでは前章で示した仮説を、前提条件を確認しつつ検証していく。

第一節 用語の規定

はじめに論を進めるにあたって『武道伝来記』に対する筆者の立場と、使用する用語(語り手)〈伝聞表現〉をここで

改めて簡潔に規定しておきたい。

第一項 筆者の立場

『武道伝来記』は浮世草子作品である。そのためまず「浮世草子」について確認しておく必要がある。以下に『近世文学研究事典』における「浮世草子」の記述を一部引用する。

近世小説の一ジャンル。啓蒙・教訓・実用といった目的を切り捨てて娯楽性に徹し、当世の風俗・人情の諸相を描きあげる現代風俗小説ともいうべきもの。浮世草子は、天和二年（一六八二）一〇月刊の『好色一代男』（西鶴）に始まる。それは、上方を中心に、以降約一〇〇年流行するが、その素材は多様であり、作風や方法の面でも、それぞれの時期によって変化しその流れは一樣ではない。⁷⁴

このように浮世草子は「近世小説」として規定されている。その認識のもとまずは『武道伝来記』が小説として虚構されたものであると示さなければならない。特に本論では伝聞表現という、内容の事実性をめぐるトピックについて考察していくため、本作を虚構として書かれたものか記録としてかかれたものかを考えることが必要となる。前章で確認したとおり、谷脇・杉本両氏は『武道伝来記』序文の「筆のはやし詞の山心のうみ静に：」とする部分にそれぞれ「事実の正確な見聞ではなく、修辞を盛大に用いていることを強調する部分」⁷⁵「武士の道、非常なる世界の創作」⁷⁶とする解釈をなし、本作が伝聞の体を装った虚構の話を綴っているものとして扱っている。この点に関して筆者も同様の立場をとる。それは『武道伝来記』における以下の記述を根拠とする。

(ア) 情の日数かさなるを天鷹兎の枕より外に知者もなかりしに思ひの種となりて雪中の花に見ながら青梅もがなとない物すきをして腹臑おかしげになりぬ。(二の二)

(イ) …人魚目前にあらはれ出しに。舟人おどろき何れも

氣をうしなひける。金内荷物にさし置たる半弓をおつ取是大事とはなちかけしに手こたへして其魚忽ちしづみける。(二の四)

(ウ) …此詞を暇乞にして立別れぬる哀れ袖より外にとふ者もなし。(四の三)

これらの傍線部が示すのは、当事者しか知りえないことが伝聞される内容の中に含まれているということである。また次のような記述にも注目したい。

(エ) 此事意趣はたしかならずして國中にかくれなし。(六の三)

ここでは伝聞される内容が必ずしも事実に基づくとは限らないということが示されている。こうした描写から『武道伝来記』が伝聞される内容の曖昧さを当時の読者にも示していることが確認できる。そのため筆者も『武道伝来記』を伝聞という体をとる虚構の話という前提に立つて本論を進める。

第二項 〈伝聞表現〉の規定

次に本論で使用する用語〈伝聞表現〉の規定を行いたい。「伝聞」について、『日本国語大辞典』では次のように説明している。

①「する人から伝え聞くこと。人づてにいつたわること。いつたえ。噂(うわさ)に聞くこと。また、その噂。」

②文法で、話し手自信の判断でなく、人から聞いたこととして述べる語法。⁷⁷

前章で示した仮説は、『武道伝来記』のなかで取り立てて前景化されることのない(かといって全く描かれないわけではない)不特定多数の大衆、すなわち「世間」に焦点化したものである。その世間を通して語り手に伝わってきた話を「集めぬ」(序文)と示している。そのためここでは〈伝聞表現〉を「語り手が物語の内容に対して人から伝え聞いたものであることを示す表現」と大きく規定しておく。ここに杉本氏が指摘した「となり」や「語り伝えし」等が含まれるがこの内実に関しては本章で後述することとす

⁷⁴ 岡本勝・雲英末雄『近世文学研究事典』(桜楓社・昭和六十一年)「浮世草子」谷脇理史執筆項。なお本書は平成十八年に新版を刊行しているが、「浮世草子」に関しては同執筆者・同内容であるため、ここでは引用に適した旧版を用いた。

⁷⁵ 谷脇理史『新編日本古典文学全集』校注・解説(小学館・平成元年)。

⁷⁶ 杉本つとむ『井原西鶴と日本語の世界―ことばの浮世絵師―』(彩流社・平成二十四年第二章「西鶴 新文章の創始と方法」より)。

⁷⁷ 『日本国語大辞典 第二版』第九巻 日本国語大辞典第二版編集委員会(小学館・平成二十一年第六刷)。

る。

第三項 〈語り手〉の規定

第一項に関連して、この作品を虚構のものとするとき、考えねばならないのが物語を進める存在の規定である。その存在を本論では「話し手」と区別して、〈語り手〉と呼称することとする。松田修氏は「かたり」と「はなし」とを区別して以下のように言及している。

「かたり」は、過去(とその書物)に密着し、伝承の連続性を期待する。「はなし」は現在に密着し、一回性の消費を期待する。「かたり」は、事実と虚構の両面を担いつつ、「かたり」としての真実を自ら要求する。⁷⁸

この解釈に基づくとするのならば〈伝聞表現〉を多用して、少なくとも表面的には過去のことを伝聞するかのようには物語内容を進める存在を〈語り手〉と呼ぶのはひとまずは適切であるように思う。松田氏は続けて「先に述べた両者の基準から、当然のことであるが、西鶴ははずれていない」とし、『武道伝来記』については「西鶴作品中どちらかといえば「語り」性のつよい」⁷⁹作品とみなしている。さて『読むための理論・文学思想批評』『語り』の項目において小森陽一氏は次のように説明する。

つまり「語り」は、具体的な音声言語による伝達行為の場を前提にして成立するわけだが、文字文化としての「物語」は、事物を具体的にさし示さない曖昧表現としての「物」が「語り」についているわけで、正統的な「語り」における「語り手」を虚構化し、いわばブラック・ボックスに囲い込んだ表現形態ということになる。⁸⁰

無論これは「語り」一般に対する言及であり、そのまま西鶴の浮世草子作品にすべて持ち込むことはできない。だが少なくとも「西鶴小説は、テキストから、現実の西鶴(作者)がみえない構造をもち、それが暉峻の西鶴論のような「作家論」的作品論の出にくい原因となっている」⁸¹とする中嶋隆氏の指摘は「正統的な「語り」における「語り手」を虚構化」という言及と重なる。中嶋氏は次のように

⁷⁸ 松田修「西鶴論の前提」松田修・堤清二編『解釈と鑑賞別冊 講座日本文学 西鶴上』(至文堂・昭和五三年)。
⁷⁹ 松田修「西鶴論の前提」(前掲)。
⁸⁰ 小森陽一「語り」石原千秋ら著『読むための理論 文学思想批評』(世織書房・平成三年第一刷)。
⁸¹ 中嶋隆「西鶴研究案内」中嶋隆編『21世紀日本文学ガイドブック④ 井原西鶴』(ひつじ書房・平成二十四年)。

続ける。

西鶴作品の「話者」(narrator)について、当時の読者は作者西鶴と区別しなかっただろう。でも、この西鶴は、現実の西鶴(テキストの外に実在する西鶴)ではなく、受容コードから形成された作者であって、いわば、テキストに内在する作者である。⁸²

すなわち西鶴作品それぞれの語り手は「西鶴」という記号で緩やかにつながって読者に処理されるとしても、決して同一人格ではなく、それぞれがその都度異なる人格として「虚構」されるものであると捉えることができる。『武道伝来記』における〈語り手〉もその例に漏れない。これに加え中嶋氏は「登場人物との重層関係」(前掲一章)を指摘し、結論として語り手と作者である西鶴とを切り離した読みを推進する。本論において使用する〈語り手〉も、虚構された存在として現実の作者西鶴と切り離し、また語られる内容についても虚構性を強く有するものとして規定しておきたい。

第二節 仮説成立の前提条件

一章において示した仮説を確認したい。それは、武士を的外れに賞賛する世間と同調することで、武士だけでなく世間をも批判の対象としており、その場合〈伝聞表現〉が世間と〈語り手〉の同調性を強化する記号として機能している、とする内容である。第一章に示したとおりこの仮説は西鶴作品における二つの記述から導き出した。その記述それぞれに対する筆者の認識が不適切でないことを本節で確認したい。

二つの記述のうち第一が『武道伝来記』の序文であり、「諸国に高名の敵うち其はたらき聞伝て」(序)と賞賛の意を示しているにも関わらず、所収される内容が「其後の敵討物に必ず伴ふやうな武勇談に専らでない」⁸³という矛盾が指摘できる。この点からまず、『武道伝来記』の序文に賞賛の意を読むことが適切であるという点を確認する必要がある。

第二が『武家義理物語』巻三の一「発明は瓢箪より出る」冒頭における記述である。筆者は、本話の語り手が「武士」と「一侍の本意のように沙汰」する周辺(二世間)の二重の批判対象を捉えているとした。だがこのうち前者が「武士」と明確に指示されているのに対し、後者は「沙汰せしが」と、具体的な名詞を示さず、「沙汰」に対する主語が明示されていない。そのため解釈によっては「武士」が自分の行いを自分

⁸² 中嶋隆「西鶴研究案内」(前掲)。
⁸³ 山口剛『西鶴名作集下』解説(日本名著全集刊行会・昭和四年)。

で「侍の本意のように沙汰(報告)」すると捉えることも不可能ではない。この解釈の可能性を否定し、語り手が「武士」と彼らを取り巻く周囲に対して二重に批判していることを確認したい。

第一項 『武道伝来記』序文における〈語り手〉の賞賛

『武道伝来記』は序文に、「諸国に高名の敵うち其はたらき聞伝て」と直接的な〈伝聞表現〉を掲げ、「よろこひの舞鶴是を集ぬ」として〈語り手〉の編集者としての立場を明示する。筆者はここに〈語り手〉の、「集」られた話に対する賞賛の意を読む。その点を確認したい。

まず手がかりとなるのは「高名」である。「高名(Comyo)」について『邦訳日葡辞書』では「高い名(Takai na)」とともに、「戦争の際に立てた或る手柄によって得たよい評判や名声」⁸⁴⁾と説明している。『武道伝来記』における用例は右の序文における記述を除き、二例確認できる。

(才) 先年関ヶ原の陣旅におきしときかれが親安川権臧我らが先祖隼人と同じ組下成しが互いに戦功をばげみ高名互角の感状有、兩輩共に千石づゝ所知くだしおかれ役儀等しく…(一の四)

(力) 主膳重ねて此程の百足の首尾家中にかくれなもなき是ざた田原藤太殿と云捨て通られける大助宿に歸り覚悟して相番の中辻久四郎方へ行て前夜の義は當座の一興にして武士の高名になるべき事にはあらず。(七の三)

(才) において武士である「権臧」「隼人」に対し「戦功」「千石づゝ所知くだしおかれ」といった明らかな肯定的評価を読むことができるため、それらと並列される「高名」も「よい評判や名声」(日葡)と同様の意味合いで使用されているといえる。(力)においても「百足」を退治しただけで「家中にかくれもなき是ざた」(力)と肯定的評価を得た「大助」が、「高名になるべき事にはあらず」として「よい評判や名声」に相当しないことを主張しており、同様の解釈をなすことができる。

一方で『角川古語大辞典』では「高名」の記載はないものの「なた／だかし【名高】」について「名がよく知れ渡っているさま。有名であるさま。」⁸⁵⁾と説明している。同

様に『時代別国語大辞典 室町時代編』でも「なたか・し」名高し」という項目をにおいて「その名声・評判が、広く世間に知れわたっているさまである。」⁸⁶⁾としている。両者が示すのは、『日葡辞書』と異なり「評判」や「名声」はあるとしても、かならずしもそれが「よい」ものとして賞賛されているわけではなく、単に「有名」「知れわたっている」のみに留まる語釈である。そしてどうやら谷脇氏はこの「高名」を、筆者とは異なり、単に「有名」であるといった意味合いで捉えていたようである。それは以下のような記述から伺える。

・しかし、そのような読者たちは、『武道伝来記』を一覧して、戸惑ったにちがいない。「高名な敵うち」であるはずなのに、そこには一人として馴染みの人物が出て来ないようであるし、第一、その敵討が何年何月に行われたものであるかを書いた作品すらないからである。⁸⁷⁾

・西鶴が「高名の敵うち」と称している以上、おそらくは後述のように事実には大幅な改変を加えていると思われるにしても、当時の読者の一部には、その話の種(素材とした当世の事実)が分かったかもしれない。⁸⁸⁾

たしかに、「高名」に対して単に「有名」であるとする谷脇氏の解釈は『角川古語大辞典』『時代別国語大辞典 室町時代編』の「名高(い)」の記述を踏まえれば無理のあるものではない。この解釈をもとにすると、『武道伝来記』の序文と本文との間に不整合はないということになってしまう。加えて前述のとおり『武道伝来記』における序文を除く二例の「高名」(一の四・七の三)に賞賛の意が認められるものの、用例数が少ないだけに十分であるとはいえない。

そのため次に「はたらき」に着目したい。『時代別国語大辞典 室町時代編』では「はたらき」について以下の説明を示している。

① その場その場で適宜とる、人の具体的行為・行動。

学芸出版・平成二十四年。

⁸⁵⁾ 『時代別国語大辞典 室町時代編四』室町時代語辞典編集委員会(三省堂・平成十二年)。

⁸⁶⁾ 谷脇理史『武道伝来記』論序説―読みの姿勢をめぐって―『文学』五十一巻八号所収(岩波書店・昭五十八年)。

⁸⁷⁾ 谷脇理史『新編日本古典文学大系』校注・解説(岩波書店・平成元年)。

⁸⁸⁾ 『邦訳日葡辞書』土井忠雄 森田武 長南実 編訳(岩波書店・昭和五十五年)。

⁸⁹⁾ 『角川古語大辞典 第四巻』中村幸彦 岡見正雄・阪倉篤義 編(角川

②特に能で、動作によって表現されたところをいう。
③心身が、その場で發揮すべく備えている機能。
また、それが当を得て發揮されたところ。

④所期の目的を果たすべくなされた仕事、成果。また、特に戦場に出ての活動、また、その戦果。⁸⁸

②については除外するとして、①、③、④の意が序文における「はたらき」の具体的な意味内容に直結しているだろう。このうち③、④にはそれぞれ「当を得て發揮されたところ」、「成果」「戦果」といった肯定的なニュアンスが含まれていることに留意しておきたい。ここでの論点は③や④が示すように、『武道伝来記』序文に示される「はたらき」に賞賛の意を読むことができるかどうかである。さて具体的に『武道伝来記』における記述を確認したい。用例数は以下の二十三例である。

【巻一】

〔1〕此たびの手柄森之丞が働き。國中において是となり。(一の二)

〔2〕扱は森之丞殿の御はたらきにて我必死の難儀をかれし命の親御さまなれ。(一の二)

〔3〕市丸助太刀を働て首尾よく思ふ敵を打とめて。本國に歸宅して悦びの眉を開きけり。(一の二)

〔4〕なを筑波根のはたらきの後いよく恋ぞつもりける。(一の二)

〔5〕此時細井金太夫はたらきも世にあらはれ。當家稀なる者式人と其名をあげて今の世までも語り傳へぬ。(一の四)

【巻二】

〔6〕…小督は姥が働にて廣嶋をのがれ。播州明石の里にしろ有て女の道も日数へて此所に立越賤の屋の住あして…(一の一)

〔7〕…外記馬よりをりて玄関前にはしりあがるを兩方より長道具にてはさみ立心まかせにはたらかせず。(一の二)

〔8〕兩人しばしたゝかひ薄手数このはたらき文助女房の太刀をうちおとしきつと引伏。(一の三)

【巻三】

〔9〕此時のはたらき伊織十八の年と申しあぐれば。其比若年にしてよくも仕りけると即座に三百石の後加増下し給はり。(三の一)

〔10〕木工右衛門随分はたらきぬれ共病あがりにして氣勢。初太刀は勝をえたれ共。相手大勢なればつゝにうたれて哀れや。(三の一)

〔11〕…よはる所をたゝみかけて切立首尾とどめさすとき此はたらきにおどろきめしつかひの者跡なくなりぬ。(三の一)

〔12〕奥右衛門打笑ひ神妙なる御はたらきと宇右衛門が首打て目出度豊後に歸り二度其名をあげて…衆道の情武道のほまれ人の鑑世かたりとなつて…(三の二)

【巻四】

〔13〕茂右衛門すこしもさはがず此義二人承れば。いづれか前後の論に及ばず是兩人の働きなり。角弥首尾よく打取こそ仕合なれ。(四の二)

〔14〕死骸角弥があたらきのやうに取なをし立のく所へ歩横目千本勝五左衛門かけ付しに。我手柄のやうに次第をかたりけるに。(四の二)

〔15〕…團平口上の通りを我見たやうに申あぐれば。團平一人のはたらきに成。即座に五百石の御加増…(四の二)

〔16〕團平濱邊に出しを名乗掛て打濟し姥抱ながら茂吉にとどめをさゝせ天晴はたらき残る所なし。(四の二)

【巻五】

〔17〕心覚の長刀なりと脇を払はせ給ふ働き摩利支天も恐給ふべし。(五の三)

〔18〕…兩人礼儀を演て此度の首尾偏に御影ゆへなり。殊更御内方様の御働きにて願ひのまゝに此女本望をとげ此嬉しさ御恩報じがたしといつれも涙をこぼし…(五の三)

【巻六】

〔19〕女のはたらき前代ためしなき敵うち今の世迄も語りつたへり是皆薄雲といへる女の仕業…(六の一)

〔20〕討つも討たるゝも武士のならひ天晴神妙なる御はたらき御父五助御手にかゝりたり。(六の三)

【巻七】

〔21〕…自身手鎧の鞘はづして二人突倒す働きのうちにはや与四兵衛を引出し…(七の四)

【巻八】

〔22〕…薄雪にて朽木の穴見えずして太股是にふん込身のはたらきなりがたく打留られける。(八の四)

〔23〕ひらけば丹兵衛抜合一命爰にして戦ひしは天晴

『小学館新編日本古典文学全集』および『岩波新日本古典文学大系』における校注・現代語訳を適宜参照しつつ、『時代別国語大辞典 室町時代編』③④に示されたような肯定的な意を伴って使用されていると判断できるものの頭番号全十六例に印を付した。このうち「5」「12」「19」に注目したい。これらと『武道伝来記』序文における「はたらき」には共通する点がある。それはいずれも「聞伝て」(序文)、「語り傳へぬ」(5)・「世かたり」(12)・「語りつたへり」(19)といった直接的な〈伝聞表現〉を共に掲げている点である。〈伝聞表現〉に限らず、伝聞する主体が世間である点も、「諸国」(序文)、「世に」「今の世」(5)・「世かたり」(12)・「今の世」(19)などから共通性が認められる。この世間による賞賛との連動性という観点で捉えれば用例「1」の「國中」において「是きたなり」といった描写もこれらに付随するものであるといえるかもしれない。このように〈伝聞表現〉を伴って「世間から高く評価された」といったニュアンスで使用されているのがここで確認した「はたらき」の適切な語釈ではないだろうか。となれば先ほど確認した数少ない「高名」の使用例と合わせて『武道伝来記』の序文には、所収される話群に対する肯定的な評価の意を読むべきであることが分かる。無論これは〈語り手〉から所収話群への賞賛であるが、右に確認したように世間を強く意識したものであり、換言すれば世間との「重層関係」を示しているという点を念頭におきたい。またこれに伴い、本論の問題意識を支える序文と所収話群との矛盾を確認できたことを強調しておく。

やはり先に触れた谷脇氏の「高名」(序文)に対する解釈は不十分であったといえる。そのため谷脇氏の一連の「カムフラージュ」説はこの矛盾点を勘定に含まず、前章において確認した二重の相反するカムフラージュ、という問題を度外視していることとなる。その中で時代設定を補強する記号としてのみ〈伝聞表現〉を処理することは不十分な解釈として指摘できる。

第二項 『武家義理物語』巻三の「**発明は瓢箪より出る**」における〈語り手〉の批判対象

さて次に『武家義理物語』巻三の一「**発明は瓢箪より出る**」冒頭に示された〈語り手〉の「道ならず」という批判の対象について考えたい。具体的にここでは〈語り手〉の批判の対象として「武士」だけでなくそれを「沙汰」する

世間をも含み込んでおり、二重の批判対象を有していることを確認する。冒頭の記述を再度引用する。

(A) 近代は武士の身持。心のおさめやう。格別に替れり。むかしは勇をもつばらにして。命をかるく。すこしの鞘とがめなどいひつりの。無用の喧嘩をむすび。其場にて打はたし。或は相手を切ふせ。首尾よく立ちのくを。侍の本意のやうに沙汰せしが。是ひとつと道ならず。

(『武家義理物語』三の一)

これを踏まえ、はじめに「沙汰」の語義について、『時代別国語大辞典 室町時代編』における記述を以下に引用する。

- ① ある事を問題として取上げて、その是非・適不適などについて検討を加え、論議すること。また、その論議。
- ② ある事を公の場において問題として取上げて、その理非・正邪を裁定すること。
- ③ 自体に即応して対策を検討した結果、しかるべき処置をすること。また、その処置、取計らい。
- ④ 自体に対応してしかるべく取計らうよう、指示し伝達すること。また、その指示や伝達。
- ⑤ ある事を、世間で話題として取上げて、あれこれ思い思いに評論すること。また、その論評など。

このうち②は「公の場」(裁判等と考えられる)とあるため除外、③についても「処置」「取計らい」としており、文脈と合致しないので除外する。①⑤に関してはそれぞれ「論議」、「評論」としており、文脈と合致する。また④に関しても「伝達」に限っては文脈から逸脱するものではない。ここでの論点はその「論議」や「評論」の主体が当事者(ここでいう「武士」とは別の、離れたところに託されているのか否かという点にある。そのため⑤については「世間で」としている点で特徴的であるといえる。だが西鶴の武家物作品に使用される用例の中には、一部当事者が主語となるものが見られる。それらについて言及する前に、西鶴武家物作品全体としての用例数を確認しておきたい。

『武道伝来記』に限らず、西鶴の武家物作品には多く「沙汰」の用例が散見される。そのためここではその一々を列挙することは控えるが、具体的に、『武道伝来記』には約

四十例、『武家義理物語』では約二十五例、『新可笑記』では約三十例確認できる。用例数は比較的少ないものの本項で扱う『武家義理物語』を中心に考察する。『武家義理物語』において①④⑤が示すような「論議」や「伝達」、「評論」の意味で使用されるのは十五例である。問題は「沙汰」されるもの(当事者)と「沙汰」するもの(主体)が一致しているかどうかである。『武家義理物語』においては一例のみ、一致していると判断できる用例がある。それは巻五の一「大工が拾ふ曙のかね」である。

その朝、大宮の九左衛門とて家大工有しが。この男むかしは筑後にて歴この武士成けるが。義理につまりて。牢人して。思ひの外成。職人と身はならはしにて。渡世はかしこく。今朝の初霜いとはず。上京長者町へ毎日かよひしに。自然と此銀を拾ひ。ひそかに宿に歸り。我が女房はじめをかたり。是仕合の天理なり。親類かぎつて此沙汰することなかれと。能といひふくめて。其身はつねにかはらず。…其女つれあひをうたがひ出し。大分の銀。をとし有べき子細なし。いかなる難儀にあふべきも定がたし。我身の外。一門の迷惑と。女心のはかなく。此事を家主に内證かたれば。其女のいふ事なれば。をどろく斷ぞかし。(『武家義理物語』五の一)

ここで「沙汰」は「銀」を得たことを指しているが、その当事者は厳密に言えば「拾」った張本人である「九左衛門」にあたる。だが「親類かぎつて此沙汰することなかれ」と口止めされる時、「沙汰」の内容はいわば「仕合の天理」を得た夫婦へと拡大される。そのことは「其女という事なれば」という記述からも伺える。『定本西鶴全集』では「其女」を「當人の女房」⁵²とし、『小学館新編日本古典文学全集』はこれを踏まえ「当人の女房の言うことなので、驚いたのも無理はない」⁵³と現代語訳しており、いわば「女房」が「銀」を得た当事者側に近いことを示唆している。そして無論「沙汰」の主体は「家主に内證かた」った「女房」であり、当事者と主体が一致しているといえる。この場合の「沙汰」の語義は「かたれば」と換言されていることから、大きく「伝達」の意にあたる。

これと同様のものとして『武道伝来記』における二つの

用例が挙げられる。巻四の一「太夫格子に立つ名の男」、巻八の四「行水で知るる人の身の程」である。

(ギ)刀ぬきあはせて切むすびしが十藏首尾よく専左衛門うつて捨。取まはしよく立のき屋敷にかへりさたなしにして世上を聞あはせける。(四の一)

(ク)茂左衛門密に裏に出覗みしに年月ねらひし丹兵衛なれば。おどりあがりてよろこび。それより心を付て聞合せけるにあすは七つ立にして伊賀越に行とはや出立焼など馬を約束し用意せはしきに。こなたは随分さたなし夜半に立て道すがら足場のよき所を見繕しに心よき所もなく…(八の四)

(ギ)における「さた」は「十藏」が「専左衛門」を討つたことを指し、そのことを「十藏」自身が誰にもいわずに済ませたという意、(ク)については、長年付け狙った敵の「丹兵衛」を先回りした「茂左衛門」一行が、そのことをだれにも「さた」しなかったという意である。この二例と前述の『武家義理物語』巻五の一は「沙汰(さた)」の当事者と主体が一致するという点で共通している。それだけではなく、いずれの「沙汰(さた)」も「知らせる」に近い「伝達」の意で、打消を伴って「秘密にする」といったニュアンスで使用されていることに気づく。

このように僅かではあるが、西鶴作品には当事者と主体の合致する「沙汰(さた)」の用例が見つかる。だがそれはいずれも「伝達」の意で打消を伴って使用されるため、ここでの論点である『武家義理物語』巻三の一「発明は瓢箪より出る」における「侍の本意のやうに沙汰せしが」における用例とは合致しない。

またこの点を補強する記述が巻三の一「発明は瓢箪より出る」の件の記述(前引用A)の直後に示されている。

(B) 子細は。其主人。自然の役に立ぬべしために。其身相應の知行をあたへ置れしに。此恩は外になし自分の事に。身を捨るは。天理にそむく大悪人。いか程の手柄すればとて。是を高名とはいひがたし。(『武家義理物語』三の一)

これは(A)とあわせて、本話の導入部として語られる。ここに前項で触れた「高名」が含まれている点に注目したい。本話の「高名」も文脈としては「手柄」などを伴う点から

⁵² 『定本西鶴全集 五巻』校注 額原退藏 暉峻康隆 野間光辰 編(中央公論社・昭和三十四年)。

⁵³ 『新編日本古典文学全集 69 井原西鶴④』解説 富士昭雄・広嶋進 校注・訳(小学館・平成十二年)。

肯定的な意を含むといえるが重要なのはその点ではなく、

「高名」の一言があることにより、ここでの「沙汰」は『時代別国語大辞典 室町時代編』⁴に示されるような個人間でなされる「伝達」のような類の意ではなく、¹⁵が示すような「論議」「評論」であることが明らかとなる。以上を踏まえ、「道ならず」とする『武家義理物語』巻三の一の〈語り手〉が示す批判の対象について考えてみたい。

まずここで〈語り手〉が繰り返し批判する主な対象が「むかし」の「武士」(A)であることは間違いない。それはこれまで引用した(A)(B)において顕著に示されている。例えば「命をかるく」「無用の喧嘩を取むすび」(C)、「此恩は外になし」「天理に背く大悪人」(D)などが挙げられる。またこの冒頭の導入に後続する本題をみてもその点を伺うことができる。江本裕氏はこれを端的に指摘している。

滝津と竹島が危うく「無用の喧嘩」の類をして「自分の事に身を捨つる」結果になるのを救ったのは、老侍であつた。したがつて、「名譽の勘者」たる老侍の「発明」な振る舞いや、その身分(原拠の主人公の済美から類推して諸国巡見の武士か)に着目することによって、本章は冒頭の一文「近代は、武士の身持ち、…格別に変はれり」と呼応する、首尾一貫した話となる。⁸⁸(補注・中略・江本)

すなわち『武家義理物語』巻三の一において具体性をもつて焦点化されているのは「滝津」「竹島」と「老侍」というタイプの異なる二極の「武士」であることが指摘されている。ここで「滝津」「竹島」は「無用の喧嘩」をするという点で「命をかるく」する「武士」の典型ということができる。こうした「滝津」「竹島」が「老侍」と対地されることで、冒頭における批判へと呼応する。あくまで批判の主だった対象は「滝津」「竹島」のような「武士」である。

そしてこれに付随し、〈語り手〉は彼らのような「天理を背く大悪人」を「高名」なものとして「侍の本意のやうに沙汰」する存在をも「道ならず」として批判の対象としている。その存在が「武士」当人であるという可能性は先に否定したとおりであり、よってここでの「沙汰」は「武士」に対して周辺化された大衆、すなわち世間と読むことが妥当となる。

第三説 西鶴武家物における〈伝聞表現〉一覧

ここでは杉本つとむ氏の言及に則り、ほぼ同時期に成立した西鶴の三つの武家物作品である『武道伝来記』『武家義理物語』『新可笑記』における〈伝聞表現〉の内実を比較し、『武道伝来記』の〈伝聞表現〉の異質性を確認していきたい。具体的には『武道伝来記』は、〈……と語り伝へし〉であつて、〈となり〉は二話にすぎない。¹⁴とする指摘をより詳細に確認することを目的とする。その上で『武道伝来記』における〈伝聞表現〉にどのような機能が認められるのか、どういった位置づけが可能かを論じる。

第一項 西鶴武家物における〈伝聞表現〉一覧

以下『武道伝来記』『武家義理物語』『新可笑記』における〈伝聞表現〉について、「〈……と語り伝へし〉」に類するものとして「語る」「聞く」「伝へる」等の動詞及びその転成語(「世かたり」等を第一系統とし、「〈となり〉」体」に類するものである「とぞ」「とや」「となり」等を第二系統として抽出し、分類したものを示す。その際、「奥の海」には目なれぬ怪魚のあがる事その例おほし後深草院宝治元年…人魚始めて流れ寄…と世のためしに語り伝へり。』(『武道伝来記』二の四)のように冒頭部等に話の引き合いとしてだされる類の、本筋を伝聞するものとはいえないものについては除外した。また「是十藏伝へ聞て…」(『武道伝来記』四の一)のように特定の具体的な登場人物間でなされるやりとりに含まれるものも除外した。

⁸⁸ 杉本つとむ『井原西鶴と日本語の世界―ことばの浮世絵師―』(前掲)第二章「西鶴、新文章の創始と方法」より。

⁸⁹ 江本裕「西鶴武家物についての一考察―「武道伝来記」と「武家義理物語」の意識をめぐって―」『国文学研究』三十四巻所収(早稲田大学国分学会・昭和四十一年)。

第二項 『武道伝来記』における〈伝聞表現〉の特徴

以上第一項に示した表から明らかなとおり、やはり杉本氏の指定する如く『武道伝来記』には「……語り伝へし」に類する第一系統の〈伝聞表現〉が多く見られる。『武道伝来記』『武家義理物語』『新可笑記』に所収された話の数(母数)は以下のとおりである。

・『武道伝来記』…全八巻各四話、計三十二話

・『武家義理物語』…全六巻各四、五話計二十七話

(巻二の一、二話に限り連続するため、
これらを合わせて一話として扱えば全二十六話)

・『新可笑記』…全五巻各五、六話計二十六話

表には示していないが、これらの作品にはすべて序文があり、そのうち傍線を付した二作品の序文には第一系統の〈伝聞表現〉が使用されている。第一系統、第二系統の〈伝聞表現〉の総和はそれぞれ十五例、九例、九例であり、母数の差が多少あるが割合で言えば『武道伝来記』が一割多い、といった程度である。

表に示したのからまず第一系統の〈伝聞表現〉で比較してみるとそれぞれ十三例、三例、三例と『武道伝来記』が最も多いが、一方で第二系統に関しては、二例、六例、六例と『武道伝来記』が最も低い数となる。そのため第一系統と第二系統の比率でみると、『武道伝来記』における〈伝聞表現〉の内実は第一系統のものが圧倒的に大きいことがわかる。また単純に『武道伝来記』における第一系統の〈伝聞表現〉は、全項目の中で目立って数が多く、最多である。ではこれらの『武道伝来記』における〈伝聞表現〉には一体どのような特徴が確認できるのか。以下二点挙げていきたい。

(一) 世間の反応の前景化

杉本氏は次のように指摘する。

なお『宇治拾遺物語』には、〈となん・とか・とぞ〉で結ぶ文が定った形式であって、〈となり〉はない。同類の『今昔物語集』は、〈……トヤ〉で統一され、不確かさを示唆している点と異なるが、いずれにせよ、西鶴にはこうした説話の和文脈の伝統的方法とその投影が著しい。⁸⁵

『日本古典文学大辞典』も「説話文学」の項においてその「特質」として「とか」「となん」と伝承を示す結び方がしばしば用いられ⁸⁶と触れている。その意味では『武道伝来記』は「説話の和文脈の伝統的方法」を直接体意識したのではなく、それとはやや距離を置いた文体であるといえる。では『武道伝来記』の〈伝聞表現〉はどのよう⁸⁷に位置づけることが可能だろうか。繰り返すが、先に触れた谷脇氏の論考の中でこれらの〈伝聞表現〉は主に「むかし」などの言葉は出さないが、「……語り伝へて」等により「むかし」であることを示す章も多い。⁸⁸として、「むかし」「以前」「昔日」等々と同列に位置づけられている。確かに表Ⅱに挙げた〈伝聞表現〉のうちのいくつかは、「今の世までも」③、「今に語りつたへて」⑧、「今の世迄も」⑨、「むかし語りに」⑬といった具合にその前後に時間を示す単語を伴っており、この点から関連性が強いことが伺える。

だが共通しているのは時間を示す単語ばかりではない。「世」という単語に代表されるように、その話が「だれ」によって伝聞されているのかということを示す単語がいくつか見られる。一部重複するが「今の世までも」③、「世・かたり」⑤、「世・がたり」⑥、「今の世・迄も」⑨⑩、「をしまぬ人なく」⑧も「世」と同様の位置付けができるだろう。すなわち『武道伝来記』が多く採用する第一系統の〈伝聞表現〉には、物語内容の一部として世間の反応を含み込み、前景化しやすいという機能があるといえる。

こうした機能を踏まえ、本章第二節と重複するが、『武道伝来記』の〈伝聞表現〉を「沙汰」「かくれなく」「名をあげて」といった、世間に広く周知していることを示す言辞に近い位置付けとして捉えるべきであると考ええる。松田修氏は西鶴作品における「沙汰」の扱いについて、次のように言及している。

そこにはいつてくるのは評判、原義的な意味での評判である。現実の事件に対する善悪好悪、理性感性の原則による裁定の意味であり、批評し、判断するとい

第二章「西鶴、新文章の創始と方法」より。

⁸⁵『日本古典文学大辞典 第三巻』日本古典文学大辞典編集委員会(岩波書店・昭和五十九年)。

⁸⁶谷脇理史『『武道伝来記』の再評価——「虚妄の説」の説——『武蔵野文学』三十巻所収(武蔵野書院・昭和五十七年)。

⁸⁷杉本つとむ『井原西鶴と日本語の世界——ことばの浮世絵師——』(前掲)

う機能である。それがよし言葉にならなくとも、まして文字化されずとも、AをAとして伝えるのではなく、Aに対する送信者のなにかの意見が、おそらくは纏絡するものであろう。⁸⁶

「語り伝えて」等の第一系統の〈伝聞表現〉も、「世」といった不特定な大衆の反応が「なにかの意見」として出来事に付随して語られる、という意味で松田氏の右の言及と大いに重なるのである。この点についてはさらに後述する。

(二) 具体的な発話の誘発

次に助詞の「と」に着目したい。まず『武道伝来記』の第一系統の〈伝聞表現〉のうち①、②、③、④、⑫が引用の格助詞「と」を伴っている。一方で『武家義理物語』『新可笑記』の第一系統の〈伝聞表現〉の中で助詞の「と」を伴うものは「夢物語とは成ける」②のみであるうえ、これは『武道伝来記』に示される引用の格助詞「と」とは働きの異なるものである。そのため引用の格助詞「と」を伴いやすい点は『武道伝来記』第一系統の〈伝聞表現〉の一つの特徴であるといえる。

「とや」「となり」等の第二系統の〈伝聞表現〉には既に引用の格助詞の「と」が含まれていることが前提となる。そのため第一系統と第二系統のそれぞれの〈伝聞表現〉が引用するものを確認したい。『武道伝来記』第一系統の〈伝聞表現〉から、前述の「と」を伴う五例のうち①②③⑫は「古今の稀物はぞ」①、「後代にもためし有まじ」②のように、具体的な発話を引用していることがわかる。一方で残りの第一系統④や『武道伝来記』第二系統の〈伝聞表現〉は「無事に此里を立退ける」④、「柏崎の名をいはひける」①、「其跡を弔ひける」②といったように具体的な発話というよりは、要約、換言された内容に近い。これは『武家義理物語』『新可笑記』の第二系統の〈伝聞表現〉を確認しても同様であり、「天晴武士の一心とぞ」(『武家義理物語』②)、『まことに武士の仔なりけるとぞ』(『新可笑記』②)等一部を除いて、多くが要約、換言された内容を引用している。すなわち『武道伝来記』の〈伝聞表現〉は、より具体性を持った発話を引用しやすい第一系統を多く用いているという特徴が挙げられる。

以上『武道伝来記』の〈伝聞表現〉について、二つの特

徴を挙げた。これらの特徴から筆者は、『武道伝来記』のそれぞれの話が、世間によってどのような評価を受けて伝聞されているのか、という側面をより具体性をもって語ることに成功していると考ええる。つまり『武道伝来記』の〈伝聞表現〉は、他の作品と比べてより世間の反応を直接的に描写する役割を担っているといえる。

だがこれらに加えてもう一つ、触れておかなければならない点がある。それは、第一系統の〈伝聞表現〉の前後に示されているのは、世間の反応ばかりではないという点である。具体的に『武道伝来記』の次の記述を確認したい。

奥右衛門打笑ひ神妙なる御はたらきと宇右衛門が首打て目出度豊後に帰り二度其名をあけて兵之助を伊予国へ送り届けは御前の御機嫌よく。衆道の情武道のほまれ人の鑑世かたりとなつて猶其後は兄弟のちなみをやめず国里は万里に隔てつれ共互に心をかよはせける。是武士の本意かくあらまほしき事なり(三の二)

これは巻三の二「按摩とらする化物屋敷」の終盤部である。表一では⑤に当たる。本話は「梶田奥右衛門」と衆道の契を交わした「大津兵之助」が、「奥右衛門」の兄弟の敵にあたる「戸塚宇右衛門」を討ち取るという内容の話である。右に引用した本話終盤部では、さまざまな視点からそれぞれの反応がたたみかけるように連続的に示されていることがわかる。具体的に敵を討ち取った「兵之助」に対する「奥右衛門」の反応(二重傍線部)、「兵之助」を「伊予」に送り届けた「奥右衛門」に対する「御前」の反応(点線部)、「奥右衛門」と「兵之助」に対する「世」の反応(傍線部)、そして最後に本話に対する〈語り手〉の反応(破線部)が示され、いわば主要な登場人物である「奥右衛門」と「兵之助」を中心に徐々に周辺の反応に描写の範囲が拡大していくといった構図を取る。そしてそれぞれの反応は「神妙なる御はたらき」、「御機嫌よく」、「武道のほまれ」、「人の鑑」、「武士の本意」、「あらまほしき事」等々、共通して肯定的なニュアンスを帯び、大げさなまでにその評価が強調される。

恐らくこの構図は偶然できあがったものではなく、意図して周到に構築されたものではないかと考える。ここで連続的に反応が示される人物たちの順序はいわば話が伝達する順序とほぼ一致するといえるからである。まず敵を討ったことに関しては、当事者である討ち手の「兵之助」を同時空間の中で実見し首を持ち帰

った「奥右衛門」の反応が示され、それが「其名をあけて」とあるように広く世間に賞賛される。また「奥右衛門」と「兵之助」との深い念友関係に関しては「御前」の反応、「世」の反応が示され、最後に総括して自身の印象を語る〈語り手〉はまさに、伝聞される物語の末端に位置する存在である。このようにまるで噂が広がるかのように当事者を中心にして拡大していく描写対象の中で、第一系統の〈伝聞表現〉はそれぞれの反応を有機的に接続する機能を果たしているといえる。〈語り手〉の反応については巻三の二のみならず、「聞伝へて袖をひたせり」②、「をしや」⑥、「かたりつたへてあはれなり」⑦、「聞きへあはれなり」⑧、「聞きへ哀はつきず」⑪、「かたりつたへておびたし」⑫等のようにいくつか描写されているものが挙げられ、中でも②⑧⑫は「世」の反応と連続して示されている。そしていずれも⑤同様に、〈語り手〉の反応は世間の反応に対して同調的であり一貫しているといえる。つまりここから先ほどの松田氏の「沙汰」に対する言及同様に、『武道伝来記』の物語は単純に出来事のみが伝聞されて成立しているのではなく、出来事とそれに対する評価までもが対になって伝聞されていると捉えるべきことが理解できる。そうした理解を促すのが第一系統の〈伝聞表現〉である。

一般的に伝聞という形式は「語り手がその内部にかつて聞き手であつた自分を内包し、さらには別な語り手の言説を内包している幾重にも重層した言説」であり「物語内容の事実性に最終的に責任をとる言説の主体を不在にするか、カッコにくくってしまった言説」⁸⁸であるとされる。これを『武道伝来記』にあてはめて考えると、「物語内容の事実性」だけでなく「物語内容」に対する評価までを含めて、「最終的に責任をとる言説の主体」が不在、あるいは「カッコにくくってしまった」状態となり、その責任が複数化し分散してしまうため、〈語り手〉単体に追求することが困難になるということができる。こうした伝聞体の持つ多重性および、(過去の)〈語り手〉を含む複数の〈語り手〉の反応を連続的、融和的に示すという特徴は、「とぞ」や「となり」といった文末用法的に使用される第二系統の〈伝聞表現〉より、柔軟に活用が許され文中に使用することができる第一系統の〈伝聞表現〉のほうがより顕著になりやすいといえることができる。

第三項 〈伝聞表現〉に関するまとめ

本節では『武道伝来記』における〈伝聞表現〉の特徴について論じた。まず第一に『武道伝来記』における〈伝聞表現〉は杉本氏の指摘のとおり「へ……語り伝へし」やそれに類する第一系統の〈伝聞表現〉を基調としている点で他の西鶴武家物作品とは一線を画す作品であることを確認した。その上で第一系統の〈伝聞表現〉には主に世間の反応を前景化し、より具体性を持つてその反応を描写し得ている点、またそうした世間の反応と〈語り手〉の反応が連続的、同調的に示され融和している点を確認した。この点から第一系統の〈伝聞表現〉を「むかし」「以前」といった単に時代設定を補強する記号としてのみ処理することは表面的であり、「かくれなく」「名をあげて」といった世間の反応を前掲化する言辭や、松田氏の指摘と合わせて「沙汰」のように世間の評判を物語内に不組み込ませるような言辭に近い位置づけができることを確認した。

この視点はこれまで何度か触れた中嶋隆氏のいう「重層関係」と大いに関連するものである。第一章で確認したとおり、従来の『武道伝来記』の作品観の多くが武士体町人という二項対立関係に基づく膠着的な把握から、町人である〈語り手〉(西鶴)が町人読者層に向けて、武士を描いた作品であるとして認識されてきた。だがここで確認したように、『武道伝来記』に複数示された〈伝聞表現〉に着目して読むとき、描かれるのは単に武士だけでなく、武士とその周辺の世間を対象としていることが伺える。加えてそうした世間の反応と地続きの同調的な反応を示す〈語り手〉は、出来事の実性のみならず評価までも含めて伝聞しているという点で世間の延長線上に位置する存在であるということが出来る。その場合〈語り手〉は無論町人代表の西鶴などとしてではなく、あくまで自身が伝え聞いた話をさらに読者に伝えようとする世間の一部として存在しているにすぎない。つまり『武道伝来記』の〈語り手〉は〈伝聞表現〉を多用して物語を語る時点ですでに多分に「重層関係」を含み込んだ存在であると捉えねばならない。さらにこの把握を前提とするとき、武士体町人という従来の構図は無論成立困難となるのである。

第三章 『武道伝来記』における認識のズレ

前章ではまず、『武道伝来記』の序文には的外れに「侍の本意のやうに沙汰」する世間と同調することで「命をかるく」する「むかし」の武士を諷刺する語り手のポーズが示されているという本論の仮説を成立させるための二つの前提条件を確認した。一つが『武道伝来記』の序文に〈語り手〉による賞賛の意を読むことができるという点であり、この確認によって『武道伝来記』の序文と所収話群との間には少なからぬズレがあることが明らかになった。もう一つが『武家義理物語』巻三の「発明は瓢箪より出る」冒頭の〈語り手〉の記述に対する確認であり、ここから「命をかるく」する「むかし」の武士と、それを手放しに賞賛する世間が二重に批判の対象となりうることが明らかになった。また『武道伝来記』における〈伝聞表現〉について取り上げ、それらが他の西鶴武家物作品と比してより世間の反応を前景化して具体的に描写する機能を有していること、またそうした世間の反応と〈語り手〉の反応が同調的であり、出来事の実索性ばかりでなくその出来事に対する評価までも含めて伝聞されうることを確認した。

本章ではこれらを踏まえ、当事者から世間、世間から〈語り手〉へと伝聞された(という体を取る)『武道伝来記』の諸話について、その伝聞の延長線上にいる読者が、その出来事にまつわる実索性や評価をそのまま受け入れることが可能なのかという点を考察する。これは換言すれば、当事者や世間、〈語り手〉等不特定多数のさまざまな人間を経由して伝聞される物語の実索性や評価が、果たして適切といえるのかという伝聞そのものの持つ危うさに関する問題であるといえる。先に『武道伝来記』における序文と所収内容のズレについては言及した。これを例にとるならば、世間で「高名」と賞賛され、〈語り手〉によって「其はたらき聞伝」て「集」られたとされる「諸国敵討」(福題)の物語を、読者がそのまま賞賛すべき物語として受け入れることができるのかどうかということになる。

まずこの点を確認するため、第一節で『武道伝来記』にどれほど「高名」とは称し難い話が所収されているのかを確認する。またそれに伴い、『武道伝来記』に描かれたさまざまなレベルの伝聞や伝達を取り上げ、その危うさが示されていることを確認する。

第二節では『武道伝来記』の序文と所収話群との間に生じているズレと同様に、世間や〈語り手〉の認識と読者が受ける印象とにズレが生まれるような内容の話が『武道伝来記』内に含まれていることについて検証する。

第一節 『武道伝来記』の内実

本節では『武道伝来記』の所収話群から、「高名」とは称

し難い内容のもの、伝聞が不完全な伝達方法であることを体現した内容のものを挙げる。なおその詳細については補足資料としてまとめたので参照されたい。

第一項 「高名」から逸脱する物語

『武家義理物語』巻三の一「発明は瓢箪より出る」において「道ならず」と批判されている武士の特徴をまず踏まえておきたい。ここでは「勇をもつはらにして。命をかるく。すこしの鞘とがめなどいひつり。無用の喧嘩を取むすび。其場にて打はたし。或は相手を切ふせ。首尾よく立のく」ことが「侍の本意」や「高名」とは程遠いものとして「道ならず」と否定されている。なぜなら武士の命は「知行をあたへ」てくれた「其主人」の「自然の役に立ぬべしため」にあるのであって、「無用の喧嘩」などで「命をかるく」することは「此恩は外になし自分の事に身を捨る」ことになるためである。この冒頭の記述を導入部に、本編では「竹島氏」と「滝津氏」が「無用の喧嘩」に値するような争いを展開する。その内容は「滝津氏」の背中について小さな傷に対し「竹島氏」が「これ逃げ傷か」と侮辱に相当する言葉を投げかけたことがきっかけとなり討ち合いに展開しかける、といったものである。こうした些細な争いをする武士が〈無用の喧嘩〉をするような、批判すべき武士として位置づけられている。これに類するものを『武道伝来記』の中から探っていく。

表五上段には、右のような〈無用の喧嘩〉に該当する、些細な争いについて取り上げ、該当するか否かを判別したものを示した。ここから明らかなとおり、『武道伝来記』には焼香の順序争い(八の二)や人違いによる殺人(四の四)等さまざまな出来事を発端とする争い(一)が数多く描かれており、その中で嫉妬や横恋慕等の恋愛沙汰と並んで目立つのが『武家義理物語』巻三の一「発明は瓢箪より出る」の「竹島氏」と「滝津氏」のような、誹謗中傷を元とする話である。

例えば『武道伝来記』二の二「見ぬ人顔に宵の無分別」において殺された「外記」とその妹「おたね」の敵討を行うのは「八九郎」と「林八」の二人であるが、この二人は登場時、「八九郎」が「林八」に対し「腰抜け」と中傷する「當座の言葉とがめ」を理由に切りあいをしている。まさに「竹島氏」と「滝津氏」の争いとなら変わらない〈無用の喧嘩〉といえる。だが本話の場合、幽霊となって現れた「外記」の言葉から「八九郎」と「林八」は打って変わって協力し合う仲となり、結果「林八」は敵である「軍平」に討たれることとなってしまっても、「八九郎」が「軍平」

第二項 伝聞の危うさを体现する物語

を討ちはたし、「…外記林八兩人の後の世を吊ひけるといにしへの名は朽ずして今に石塔のみ残れり」といった言葉で結ばれる。「名は朽ず」という描写は、敵を討つことができた「八九郎」が世間で広く認知されたことを示す。繰り返すようだが、『武家義理物語』巻三の一「発明は瓢箪より出る」では、「無用の喧嘩」を取り結び「命をかるく」する武士は、「天理に背く大悪人」と強く批判されるべき存在であり、「いか程の手柄すればとて。是を高名とはいひがたし。」と続くことから、「八九郎」や「林八」もやはり、敵を討つという「手柄」を立てたとしても、「高名」になるべきではない存在である、といった見方ができる。同様に誹謗中傷により争いへと発展する話は一の一、一の一、二の四、三の一、三の三、五の四が挙げられる。

また「無用の」という接頭語を伴ってその争いの発端の不毛さを強調する話もいくつも見られる。「百右衛門」の「無用の高声」が争いの一因となる巻二の四、詳述されないが酔った勢いで「無用の口論」をしたことで切りあいへと発展してしまう巻四の一、上意討の際にあらかじめ「籤」で決定しておいた役割を守らない「無用の出来しだて」をして切りあいとなる巻四の二等がこれにあたる。

その他自分の名譽に執着する武士の話も散見する。巻五の三「不断心懸の早馬」は、「民部」と「判右衛門」の二人が挨拶をしたかどうかという極めて些細な問題で果たし合いに発展しかけ、「遺恨差しはさむ事なかれ」という「上意」による仲裁により「何の遺恨もなく」なったにも拘らず、二人は「世間の思はくばかり恥ぢて」酒を酌み交わして自害する。同じく馬に関連する巻八の三「播州の浦浪皆歸り打」は名馬をめぐる「井右衛門」と「木工弥」の争いが描かれるが、「木工弥」は名馬を「梅の馬場にて」「輪乗」して「自慢」してしまった手前「井右衛門」に取れたりと評判に逢ては「一分立ず」として果たし合いを申し込む。これらが示唆するのは、武士にとって「世間」の評判は多大なる影響力を持ち、時としてそれは巻五の三が示すように上意でさえも凌駕する関心事であるということである。本論に即して言えばどのような伝聞されるかが武士たちにとっては死活問題であったということである。

以上にみたように、本話では『武家義理物語』巻三の一「発明は瓢箪より出る」において否定されるような「無用の喧嘩」に走る武士たちが数多く確認できる。だが『武道伝来記』の〈語り手〉は『武家義理物語』のそれと異なり、あくまそのような武士たちや、彼らを賞賛する世間を「道ならず」として否定することないのである。

次に『武道伝来記』に描かれた伝聞の危うさを体现する話について触れたい。木越俊介氏は『武道伝来記』巻五の四「火燵もありく四足の庭」および『武家義理物語』巻四の三「恨みの数讀永樂通宝」の二話を上げ、「言葉の呪術性と負の連鎖、コミュニケーションのすれ違い・から回りの様相」が「それぞれの話において淡々と進行」している点を指摘する¹⁰⁰。篠原進氏はこの木越氏の指摘を「デス・コミュニケーション」という新たな視点で核話は再評価されたともいえる」とした上で『西鶴諸国はなし』巻一の三「大晦日はあはぬ算用」に描かれた「充分なコミュニケーション」と結束力があつた「七人の浪人」に比して、『武道伝来記』には「広言、悪口、仲人口など発話に関するトラブルがもたらす事件」が含まれていると言及した¹⁰¹。この篠原氏の言及から〈デス・コミュニケーション〉という言葉を借り受け、『武道伝来記』に描かれるコミュニケーションのすれ違いを、該当するもののみ表五下段に示した。ここでいう〈デス・コミュニケーション〉すなわちコミュニケーションのすれ違いは、言い換えれば伝達がうまく果たされなかった例であるといえる。これが『武道伝来記』に多分に確認できるとするのならば、本作の〈語り手〉には伝聞の危うさや頼りなさを随所で描きながらも伝聞表現を採用して物語を語るという逆説性が見られることになる。いくつかり上げてみたい。

まず巻三の四「初茸狩は恋草の種」を見てみたい。本話は美少年「半之丞」に対する「伴藏」の横恋慕から敵討へと発展する内容である。「伴藏」は「茸狩」に出向いた先で出会った「半之丞」に一目惚れし、翌日「たまり兼て」「半之丞」宅に出向き「心底」を語る。それに対し「半之丞」は次のように対応する。

思し召千万忝し。さりながら我らごとき者にさへかまひ申者あると申せば事おかしく。され共それ程の御深切あまり過分に存ずる上せめてはと玉の扨の底意なく見えしを伴藏付あがりして御念比の御方はどなたと問は。是はいな事御尋ねに預り近比迷惑いたす。私は程の心ざしに其御詞は似合ませぬ。いか程仰られても

¹⁰⁰ 木越俊介「井原西鶴『武道伝来記』『武家義理物語』西鶴武家物・開法のこころみ」井上泰至 田中康二編『江戸文学を選び直す』所収（笠間書院・平成二十六年）。

¹⁰¹ 篠原進『武道伝来記』の〈不好容儀〉、『青山語文』四十五巻所収（青山学院大学日本文学会・平成二十七年）。なおこうした「発話に関するトラブル」が多く含まれるのは、『武道伝来記』の三種類の柱刻のうちの一つである「武道」の計十八話の中に多く含まれるとしている。

此段は申さずと念者をいたはるの心ざし…(三の四)

「半之丞」の発話に傍線を付した。「半之丞」に念者がいることを聞いた「伴藏」は、それが「町六方」の「藤内」であることを突き止めて押しかけ、次のように脅す。

…聞ばおのれめはかたじけなくも沼菅殿の御惣領を勿躰無くも兄弟分とする事は摩利支丹も憎しと思しめさん。なれ共彼は形を見せ給はず我今弓矢八幡大菩薩の神勅に任てこゝに来る殊にけふ半之丞様の御姿を拝み奉り御流をいたゞき向後よりおそらく恒武帝の末孫竹倉半藏平正澄御後見を仕る。(三の四)

これはすべて「伴(半)藏」の発話に相当し、傍線を付したところが先の引用の「半之丞」の対応の部分となるが、この両者の発話から見ると同一の出来事に対するそれぞれの解釈が食い違っていることがわかる。「半之丞」は「せめて」ものもてなしとして儀礼的に「扨」をすすめたにすぎないのに対し、「伴藏」は「御流」をいただき「後見を仕」つたと曲解している。脅された「藤内」は「伴藏」の曲解をそのまま信じ込み「半之丞」宅へ「かけ込て」刃傷沙汰を起こす。またこの曲解は「藤内」弟「藤八」にまでおよび、「所詮敵は半之丞年来の心底翻したる侍畜生今は欠込て一太刀恨みん。」と「半之丞」を「敵」として狙う。いわば本話は誤った解釈が誤ったまま複数の人間によって伝聞されたために起こった悲劇であるといえる。

巻六の二「神木の咎めは弓矢八幡」も同様に、伝聞される情報が都合よく解釈されてしまう話である。「宮地」にて「半弓の自慢」をする「与七郎」とそれを制止しようとする「新四郎」だったが、「与七郎」の射た矢がたまたま同じ場に居合わせた「半九郎」の肩にあたり、誤って死亡させてしまう。「半九郎」に同道していた「小左衛門」は手ぶらでは帰れぬと「与七郎」を切り殺す。その助太刀として今度は「新四郎」が「小左衛門」を切り伏せその場を立ち退く。この出来事は瀕死状態の「小左衛門」の「草履取」によって「：旦那を討給ひたるは小伴新四郎殿にて有し」とのみ伝えられる。無論「草履取」は「旦那」にあたる「小左衛門」の敵が「新四郎」であることのみを伝えるものだが、「小左衛門一子沢之助」だけでなくその場につけた「半

九郎子息半三郎」、「与七郎」の弟分「時之助」までもが「：とかく我と敵は新四郎にまがひなし」と解釈して敵討に出立する。終盤部、敵として三人から狙われることとなった「新四郎」の口から発端の詳細な経緯が語られ、「半三郎」と「時之助」が互いに敵同士であったことが明らかとなり、結果この争いに加担した者は全員死亡する。

これらの二話のように、『武道伝来記』には誤った伝聞による情報の錯誤や内容の過大解釈が生じ、そのために事件が大きくなったり、悲劇へと転じたりする話がいくつか見られる。そのレベルは様々であり、中には言葉を介さないために誤解が生じるようなケースも含まれるが、合わせて詳細は補足資料に示した。このような話を複数回扱う〈語り手〉はまさに、伝聞の不完全さに自覚的である。またこれらの〈デス・コミュニケーション・ション〉に類する内容の話が、〈語り手〉の〈伝聞表現〉をも相対化することでその信用度を落とすことにも繋がりがかねない。

第二節『武道伝来記』のズレ

次に『武道伝来記』の序文と所収話群との間に生じているズレと同様のものを探っていく。〈語り手〉と世間の認識が同調的に示されるのは先に確認したとおりであるが、それを読者が同じように受け入れられるか否かという観点から、〈語り手〉および世間の認識と、読者が受ける認識にズレが生じるといえるものを「善悪」および「人物造形」という二つの項目で挙げる。

第一項 善悪に対するズレ

まず善悪という観点から巻二の四、巻八の三を見てみたい。巻二の四「命取らるゝ人魚の海」は人魚を射たと主張する「中堂金内」とその真偽を疑う「青崎百右衛門」とを中心に発展する。金内は証拠として自身の射た人魚を探しまわるも見つからずに病死、娘と妾の「鞠」が金内側についていた「野田武蔵」の助力を得て「百右衛門」を討つ、という話である。本話はこれまで「善・悪の対立を明快に割り切った勧善懲悪型」¹⁰²⁾の物語として、「武勇談に専らでない」¹⁰³⁾とされる『伝来記』の中ではやや異色に捉えられてきた。しかし井口洋が「藩を挙げての後援によるまったく至れり尽くせりの円満具足ぶりは、あまりにも度が過ぎているではないか」¹⁰⁴⁾と指摘しているように、純粹に勧善

¹⁰²⁾ 谷脇理史校注「武道伝来記」(『新日本古典文学大系』前掲)。

¹⁰³⁾ 山口剛『西鶴名作集 下』解説(日本名著全集刊行会・昭和四年)。

¹⁰⁴⁾ 井口洋『武道伝来記』試論「敵討の決断について」(奈良女子大学国語国文学研究室『叙説』昭和五十四年)。

懲悪の話として読むことを躊躇させる一篇である。その要因の一つを、本話の発端部にあたる「百右衛門」と、「中堂金内」を擁護する「野田武蔵」のやりとりを確認できる。

惣じて慥に見ぬ事は御前の御耳に立ぬがよし。鳥に羽有魚に鱗有。それ〳〵に其身かしこく自由にならぬために拙者が泉水に金魚有。わづか四五間の浅水を樂とするに此程雀の小弓にて二百筋ばかりもあかけしに。是にさへ当らぬ物兎角生物には油断がならぬ世に化物なし不思議なし。猿の面は赤し犬には足が四本にかぎると。(二の四・百右衛門)

貴殿廣き世界を三百石の屋敷のうちに見らるゝ故なり山海万里のうちに異風なる生類の有まじき事に非ず古代にも人王十七代仁徳天皇の御時飛驒に一身両面の人出る。文武天皇の御宇に丹波の山河より十二角の牛出る。文武天皇の御時慶雲四年六月十五日に長八丈横一丈二尺。一頭三面の鬼異國より来る。かゝる事共も有なれば此度の大魚何かうたがふべき物にあらずと。

(二の四・武蔵)

このやりとりを善・悪の価値基準に当てはめることはできない。それは語り手も自覚的であり、このやりとりの直後に「世間の人心なれば。百右衛門悪敷と沙汰するも有。又金内何事か申もしれずと笑ふも有。」と、周囲の反応を描写している。それにもかかわらず本話では「百右衛門」が登場時から「悪人」と造形され無理やり善・悪の対立構造に当てはめられてしまう。ここで「百右衛門」の「悪人」ぶりを具体的に示すエピソードが後半に示されているのではないか、という反論が予想される。「娘」と妾の「鞠」が「金内」の遺体と対面する場面である。

…今は是迄と金内死骸を。二人の女抱て海に飛込所へ横目の野田武蔵上意にてかけ付此有様に驚きまつ引とどめいかに女なればとて親に敵の有を知らずやといふ。二人の女合点をせず金内は病死と申。其病死は百右衛門が言葉よりとはじめを語れば。娘涙を流し其百右衛門は目を縁組しきりに申懸しに金内請給はぬ恨みにやこれ武士の心入にあらず。然らば百右衛門を討べしと…(二の四)

「娘」は「縁組」の申し入れを断ったことで「百右衛門」

の「恨み」を買ったのだとは思ひ至り、「武士の心入にあらず」と敵討を決意する。確かに一見「百右衛門」の悪人ぶりが具体的に示されたように思われる。しかし「探された」「人魚のからだ」はまだ発見されたわけではない。つまり客観的には、事情が変わったとは必ずしも言い切れない段階であるにもかかわらず、この大横目はいまや公然と百右衛門を指して、金内の「敵」と呼んでいるのである。¹⁵⁹と井口の指摘する如く、この娘の類推により百右衛門の「悪人」ぶりが示される以前に、既に「武蔵」は「百右衛門」を「敵」とみなして「上意」まで取り付けているのである。娘の類推は後付けの範疇を出ず、その真偽も追求されぬまま「百右衛門」は討たれてしまい、以下の結末に展開する。

心もとをさしとをし思ひのまゝに本意達し屋形の門を閉て御意を待請女ながら切腹申すべしと覚悟を極むるこそ石流武士の娘なれ翌日御僉義の時分おの〳〵日に惡みあるなれば老中諸役人口を揃てあしく言上申其家滅亡させける。…それより五十日程過て北浦春日明神の磯より夜中に註進申上。目なれぬ魚と最前の人魚さしあげけるに。かくれなき金内が矢の根皆と感してなき跡にてさふらひの名をあげける(二の四)

佐々木昭夫は発端のやりとりに対して「百右衛門の「世に化物なし不思議なし」の方がこの場合より真実を衝き、あの人魚にも当てはまるかに思われる。特に野田武蔵が相手をいさめようとしていかにもしたり顔に「分別貞にて」言ったというからその感は強まる。」として次のように指摘する。

この一話から感じられるのは、正義の方は言うことに少々無理があつても勝ち、皆に憎まれてゐる悪人の方はたとえ言い分が少々正しくても負けるという幾分不気味な真理である。¹⁶⁰

佐々木の指摘には首肯できるが、「勝ち」「負け」「正義」「悪人」という価値基準が「皆と」つまり世間に依拠していることを忘れてはならない。

本話と同様の展開を辿るものとして、巻八の三「播州浦浪皆歸り打」が挙げられる。馬商人「弥太夫」の名馬をめ

¹⁵⁹ 井口洋『武道伝来記』試論「敵討の決断について」(前掲)。

¹⁶⁰ 佐々木昭夫『近世文学を読む 西鶴と秋成』(翰林書房・平成二十六年)。

ぐつて「小湊井右衛門」と「樗木工弥」が争い、決闘に発展する話である。

…其比小湊井右衛門とて家中一番の馬好まづ此屋形に行て見せけるに。其勢耳に替てもほしき心底あらはれしに。弥太夫仕合爰と思ひの外に高ばり金三枚と申出すを拾貳兩より十五兩迄望みしに。大かた談合しまりて代金は明朝相わたすにして厩につながせ弥太夫は宿に歸る時。道にて出来出頭の樗木工弥に逢其方が最前に引る馬代金にかまはず此方へ取べしと云に欲心萌し其御心底ならば只今引て参るべし…(八の三)

これは本話の冒頭の場面だが、傍線部に示したように「弥太夫」の強欲さが事件の発端として描かれている。「弥太夫」は先ほど馬を売った「井右衛門」の屋敷へ行き、主人が留守にも関わらず「少しのうち借りたき」と偽り、「井右衛門」方の若党が「合点」しなかったために「いまだ金取りたるにてもなし」と代金が支払われていないことを理由に強引に馬を「木工弥」方へと引いていつてしまう。「弥太夫」は事態に気づいた「井右衛門」に詰め寄られ、しかたなく再び馬を「木工弥」方から「伊右衛門」方へ運ぼうとした折、「木工弥」に事情を聞かれる。

子細を聞ば始に井右衛門殿契約され共手形致さず所詮留守のうちに引いて参た御立腹此上はたとへ百両にても賣は致さねど右の云わけにちよつとおめにかけて参らん間いかやう共御恩に着申べしと達て云に。

こうして一時的に「木工弥」から借りた馬を引いて「井右衛門」方に向かった所、「刀に反を打」たせた「井右衛門」に「手形」(契約書)を要求され、困惑した「弥太夫」は「金子十五両」を受け取り即座に本国へ出奔してしまう。ここでは明らかに「弥太夫」が悪として造形されていることが確認できる。「井右衛門」と「木工弥」はそれぞれ馬をとられたと気付いた直後に「弥太夫」に責任を追求することから、両者も「弥太夫」を悪と認識していることが読み取れる。

この場合「井右衛門」と「木工弥」は同様に被害者であり善・悪の構造は成立しない。「弥太夫」はしきりに「井右衛門」の代金未払を契約不成立の理由としているが、それは「代金三枚に極め則明朝渡すべし」とした「木工弥」にも適応される。それどころか馬が奪われた経緯も馬を自

慢げに乗り回す様子も両者同様に描かれ、挙句「一騎打」へと発展した両者に対し、語り手は平等に賛辞を送る。

井右衛門うなつき晩程此松原へ竊に立合此方も僕一人もつれずたがひに一騎打と其宮に立より返事さらくと書て使もどして宿に歸り支度して兩人立出。云しことくに只一人つゝ見事なる仕かたぞかし。

いわば「井右衛門」と「木工弥」ははじめ等質な立場として念入りに描写されているのである。だが結末はそうではない。この後一騎打は「井右衛門」に軍配があり、「木工弥」の息子たちが「井右衛門」を敵として狙うことになるが、ことごとく失敗に終わり、息子の一人である「孫七」を返り討ちにした「井右衛門」は「以上四人の敵今は壺人も残らず絶て井右衛門が手柄隠れなし世にはかゝる例も有物かは」と一方的に賞賛されて物語は幕を閉じる。ここにも「手柄隠れなし」という言葉が挿入されることによって、本話が世間に広く認知され賞賛された話であるということを強調している。

以上の二話の内容のみを読むうえでは、どちらが善でどちらが悪かを断ずるのは難しい。「悪人」として造形される「百右衛門」の主張は正しく、また「井右衛門」「木工弥」は対等の立場として描かれている。逆に『武家義理物語』巻三の一「発明は瓢箪より出る」冒頭部の価値観から言えば、いずれも「無用の高声」や馬の所有権、武士の「一分」をめぐる「命をかるく」する武士にほかならず、その意味では皆悪人ということもできる。にも拘らず終盤において勝者の側が「皆と感じて」「手柄隠れなし」といった具合に世間からの賞賛を得たことを明示し、〈語り手〉自身は「石流武士の娘なれ」「世にはかゝる例も有物かは」と言いはしても、『武家義理物語』巻三の一「発明は瓢箪より出る」の〈語り手〉のようにそれを否定することはないのである。

第二項 人物造形のズレ

ここでは本章で先に触れた巻三の四「初茸狩は恋草の種の「能登屋藤内」を見てみたい。美少年「半之丞」と念友関係にある彼は「名を得し町六方のかくれなく。心達の結構なる御侍は是が旗下に御機嫌取程の器量」と人物造形されている。だが直後に恋敵である「竹倉伴(半)蔵」に脅される場面で描かれる「藤内」はこの人物造形からは程遠い。

藤内まづぎよつとして我に是程に物いふ者なし。い

か様公儀の権威もありやと三指になつてうかゞひぬるに。…石流の藤内此勢に胸轟き雷の落かゝる心ちしてふるひくいかやう共御存分にあそはし私一命おたすけ頼奉りますると涙をうかべけるに不便さまさりて…

このように描写された「藤内」は滑稽なほどに戯画化された臆病な人物であり、あらかじめ説明されていた人物造形とは真逆の印象を与える。この直後「是程に名を得し男達もさすが長袖のわりなく胸のほむらは塩釜の浦見は半之丞」と藤内が衆道関係にある「半之丞」を逆恨みすることが示されるが、先ほどの引用部と合わせて語り手は「石流の藤内」「是程に名を得し男達」「さすが」とあくまで世間の「能登屋藤内」像をベースに物語を進めるため、この人物造形と、実際に読者が受ける印象とは大分距離が生じるといえる。そしてここでも、あらかじめ示された「藤内」の人物造形が「名を得し」「かくれなく」として、世間の認識に依拠したものであることが示されているのである。

その他巻一の三「といふ俄正月」の「十太郎」は「つねくおとなしき若い者」という人物造形の直後に「刀をつとりかけ出し」て弟「亀松」を侮辱した「小者」を抱える「善太夫」の元に切り込もうとし、一晚謝罪を待つべきだとする母に制止される。巻六の三「毒酒を請太刀の身」の「白右衛門」「用助」「瀧之進」は「平生兄弟同然にかたり、たとへいかなる事ありても引まじきかたらひなしぬ。」という関係設定の直後、雷に驚いた「瀧之進」とそれを馬鹿にする「白右衛門」「用助」の口論が描かれ、結果「瀧之進」は二人に殺されてしまう。これらはいずれも、あらかじめなされた設定を直後に逸脱する例であり、〈語り手〉による形容と実際の展開とが食い違うズレとして挙げられる。

以上「善悪」「人物造形」という観点から、世間・〈語り手〉の認識と読者の認識にズレが生じると思われるものをいくつか挙げた。『武道伝来記』に所収される話は事実性ばかりでなく評価までもが伴って伝聞されるという点に前章で触れたが、ここで確認したように、『武道伝来記』には〈語り手〉によって伝えられる評価をそのまま受け入れたい箇所がいくつか挙げられるのといえる。また一方で伝え聞くことの危うさ、〈デス・コミュニケーション〉を象徴するような話も随所に描かれている。これは換言すれば『武道伝来記』の〈語り手〉が伝聞の危うさ、不完全さに自覚的でありながら、あえて〈伝聞表現〉を用い、伝聞体で物語を語るということである。これらから『武道伝

来記』における〈語り手〉は立場としては世間の側に立脚し伝聞という文体で「高名の敵うち」を語るポーズを見せながらも、むしろその実は「高名の敵うち」として読まれることを拒むような装置を仕掛けていると言えるのではないか。この点から本章において設定した仮説を一部確認できたといえる。すなわち『武道伝来記』における〈語り手〉は〈無用の喧嘩〉をする武士たちを「高名の敵うち」として「沙汰」する立場にあることから、『武家義理物語』巻三の一「発明は瓢箪より出る」冒頭の〈語り手〉が「道ならず」と否定した武士と世間との関係を、自らポーズとして・体現していることとみなすことができるといえる。

おわりに

ここでは本研究の総論として達成及び課題について述べたい。

本研究は『武道伝来記』における「聞伝て」（序文等の〈伝聞表現〉）に焦点化しその機能を探ることを目的に進めた。その際『武家義理物語』巻三の一「発明は瓢箪より出る」冒頭の〈語り手〉により批判される武士および世間の関係を『武道伝来記』が体現しているという仮説を立てて進めた。具体的に第二章において『武道伝来記』における〈伝聞表現〉にはより世間の反応を前掲化しやすい第一系統の〈伝聞表現〉が際立つて使用されていることが確認できた。またこうした〈伝聞表現〉を伴って世間の反応ばかりでなく〈語り手〉の反応までもが同調的に示されることを確認した。世間の反応および〈語り手〉の反応は換言すれば出来事に対する評価とすることができ、その意味で松田修氏の指摘する「沙汰」の位置づけと同様事実性ばかりでなくその評価までもを伴って世間から〈語り手〉へと伝聞されてしまうという側面を持つことを確認した。

この機能を踏まえ第三章では、世間から〈語り手〉へと伝聞された『武道伝来記』各話を読者が同様の評価のまま受け入れることができるのかという観点から、序文に示された「高名な敵うち」から逸脱する〈無用の喧嘩〉とも言うべき話を挙げた。またこれに伴い「善悪」「人物造形」に関して、〈語り手〉の形容とは異なる印象を与えるような話をいくつか挙げた。その数は決して多いとは言えないものの、一部読者が評価ごとそのままに受け入れることを躊躇するような内容の話が含まれていることが確認できた。またこれに合わせて、『武道伝来記』においてコミュニケーションが適切になされなかったことから悲劇に転じたり、事が大きく変わったりする話を確認し、その中に言葉の曲解や誤認、盲信を象徴するような内容の話が含まれていることから、〈語り手〉が伝聞の危うさ、不完全さに自覚的であったと結論づけた。これらをまとめ第三章では、『武道伝来記』の〈語り手〉は世間に同調的な姿勢を示しいわば世間と共犯的に〈無用の喧嘩〉をする武士たちを賞賛するポーズを見せながらも、そのような評価を読者にそのまま受け入れられることを拒んでいると結論づけた。またこの確認により本論第一章で立てた仮説を一部立証することができたと考える。すなわち『武道伝来記』には賞賛に値しない〈無用の喧嘩〉を少なからず収めているにも拘らず結末で賞賛したり、また序文から「高名の敵うち」「はたらき」とみなして扱っていたりする点から、まさに〈語り手〉が世間の一部となつて武士たちを賞賛してい

るという構図を確認でき、その意味で『武家義理物語』巻三の一「発明は瓢箪より出る」において批判されている武士とそれを賞賛する周辺との関係を体現しているとみなすことができる」と結論づけた。

最後にこのような〈伝聞表現〉の新たな機能の意義について、第一章で述べた研究史概略を踏まえて述べたい。具体的に従来の研究史では片岡良一氏、暉峻康隆氏、森銃三氏らに端を発する武家物低調説や、中村幸彦氏に代表する談理の作品観及び武家を模範とする見解、高尾和彦氏や谷脇理史氏らによる武士批判などの諸論考において、描かれるものとしての武士と描くものとしての町人作家西鶴という強固な二項対立が根幹にあることを指摘した。こうした状況及び現在中嶋隆氏において言及されている〈語り手〉と作者西鶴を切り離す試みを踏まえ本論に示した〈伝聞表現〉の機能の価値付けをするのならば、機能の一つである世間の前掲化はまさに描かれるものを武士のみに限定せず、彼らを手放しに賞賛してしまう世間をもその範囲内に収めなければならないという視点を得られる。いわば再考されるべきは〈語り手〉と作者西鶴ばかりでなく、より巨視的な視点でこれまで前提とされてきた構図自体を見直す必要があるのではないかという視点を〈伝聞表現〉という問題意識から提供できたのではないかと考える。無論武家物の一つとして括られる『武道伝来記』に武家が多分に描かれていることは相違ない。だが〈伝聞表現〉が世間の反応を前掲化したように、そこに描かれるのは武家だけではない。伝聞のように階層や立場を超えてさまざまな人々の間で展開される大規模な言語コミュニケーションは、そうした周辺化された細部へも目を向けるきっかけを与えてくれる。

次に本研究における問題点を確認しつつ、今後の課題について述べたい。本研究における一番の問題点は比較の範囲を西鶴の武家物作品に限定したために限られた結果しか得られず、またそれぞれの〈伝聞記号〉の使われ方に関する用例も極めて少ない数となってしまったために、西鶴武家物内での相対的な傾向を得るにとどまってしまった点である。特に〈伝聞表現〉という観点で捉えるとするのならば、説話の影響を強く受けているとされる『西鶴諸国はなし』や見聞記の体裁をとる『懷硯』等、比較対象となりうる作品が今回扱った作品以外でもいくつか挙げることができる。より広範囲からの探索が必要である。また〈伝聞表現〉の対象に関しても同様、今回扱った〈伝聞表現〉は主に「語り伝へし」系統のものと「とかや」系統のもの（本論ではそれぞれ第一系統、第二系統）のみであり、助動詞等に触れることができなかった

たことも用例不足の反省として挙げられる。これらの反省点を課題として今後の研究にいかしたい。

また西鶴以前の先行文芸との関連性という視点が欠落していた点も課題として残る。特に〈伝聞表現〉に関していえば、従来の説話文学との関連性が重要な視点となるが、この点が本論には欠落していた。この問題は例えば「語り伝えてあはれなり」等のように、〈伝聞表現〉を一種の定型句として捉える必要性を示す。そしてそれは説話に限らず、歌舞伎や文楽、狂言などの大衆芸能も含めたあらゆる文芸の中で繰り返し用いられる決まり文句が、それぞれのコンテキストのなかでいかに再文脈されているのかという新たな問題を導き出す。その意味では本論を通して西鶴の浮世草子作品である『武道伝来記』における〈伝聞表現〉について検討することができたと同時に、一方でさらに大きな余白の存在を感じさせるものとなった。前述の二つの課題である探索範囲の拡大および〈伝聞表現〉の再規定を含めて、今後はより大きな枠組みのなかで〈伝聞表現〉について探り今回得た考察を相対的に位置付けていきたい。

最後に、本論文の執筆にあたって熱心御指導してくださった吉田比呂子先生をはじめ、さまざまな視点から御助言等くださった先生方に、この場をお借りして心から感謝申し上げます。

〈参考引用文献一覧〉

○引用テキスト

- ・『定本西鶴全集 第四卷』頼原退蔵 暉峻康隆 野間光辰編(中央公論社・昭和三十九年刊)
- ・『定本西鶴全集 第五卷』頼原退蔵 暉峻康隆 野間光辰編(中央公論社・昭和三十四年)

○参考テキスト

- ・『校訂西鶴上』尾崎紅葉 渡部乙羽校訂(博文館・明治二十七年)
- ・『井原西鶴集』笹川臨風(国民図書株式会社・昭和二年)
- ・『井原西鶴集』藤村作 形田藤太(日本文学叢書刊行会・昭和四年)
- ・『西鶴名作集 下』山口剛(日本名著全集刊行会・昭和四年)
- ・『武道伝来記』横山重 前田金五郎 校注(岩波文庫・昭和四十二年)

- ・『日本古典文学全集 井原西鶴集 三』谷脇理史 神保五弥 暉峻康隆 校注・訳(小学館・昭和四十七年)
- ・『近世文学資料類従 武道伝来記』野田千平(中央公論社・昭和五十年)

- ・『新日本古典文学大系 77 武道伝来記 西鶴置土産 万の文反古 西鶴名残の友』谷脇理史 富士昭雄 井上敏幸 校注(岩波書店・平成元年)
- ・『新編日本古典文学全集 69 井原西鶴集 ④』富士昭雄 広嶋進 校注・訳(小学館・平成十二年)

○辞書・事典類

- ・『元禄文学辞典』佐藤鶴吉著(藝林社・昭和三年)
- ・『世界文芸大辞典 五』吉江喬松(中央公論社・昭和十二年)
- ・『邦訳日葡辞書』土井忠雄 森田武 長南実 編訳(岩波書店・昭和五十五年)

- ・『日本古典文学大辞典 第三卷』日本古典文学大辞典編集委員会(岩波書店・昭和五十九年)
- ・『近世文学研究大事典』岡本勝 雲英末雄編(桜楓社・昭和六十年)

一年

- ・『読むための理論—文学・思想・批評』石原千秋 木股知史 小森陽一 島村輝 高橋修 高橋世織 著(世織書房・平成三年)
- ・『時代別国語大辞典 室町時代編四』室町時代語辞典編集委員会(三省堂・平成十二年)

- ・『新版近世文学研究大事典』岡本勝 雲英末雄(おうふう・平成十六年)

- ・『日本国語大辞典 第二版 第九卷』日本国語大辞典第二版編集委員会(小学館・平成二十一年第六刷)

- ・『角川古語大辞典 第四卷』中村幸彦 岡見正雄 阪倉篤義 編(角川学芸出版・平成二十四年)

○書籍

- ・滝田貞治『西鶴の書誌学的研究』(白帝社・昭和十六年)
- ・暉峻康隆『西鶴 評論と研究 上』(中央公論社・昭和二十八年)
- ・暉峻康隆『西鶴 評論と研究 下』(中央公論社・昭和二十八年)
- ・森銑三『西鶴と西鶴本』(元々社・昭和三十年)

- ・暉峻康隆編『日本古典鑑賞講座第十七巻 西鶴』(角川書店・昭和三十二年)

- ・高尾一彦『近世の庶民文化』(岩波書店・昭和四十三年)
- ・宗政五十緒『西鶴の研究』(未来社・昭和四十四年)

- ・森銑三『西鶴本叢考』(東京美術・昭和四十六年)
- ・水谷不倒『水谷不倒著作集 第六巻』(中央公論社・昭和五十年)

- ・片岡良一『片岡良一著作集 第一』(中央公論社・昭和五十四年)

- ・暉峻康隆『西鶴新論』(中央公論社・昭和五十六年)
- ・谷脇理史『日本の作家 25 浮世の認識者 井原西鶴』(新典社・昭和六十二年)

- ・谷脇理史 西島孜哉編『西鶴を学ぶ人のために』(世界思想社・平成五年)

- ・野口武彦『三人称の発見まで』(筑摩書房・平成六年)
- ・荒川有史『西鶴 人間喜劇の文学』(こうち書房・平成六年)
- ・谷口眞子『武士道考——喧嘩・敵討・無礼討ち』(角川出版・平成十九年)

- ・杉本つとむ『井原西鶴と日本語の世界——ことばの浮世絵師』(彩流社・平成二十四年)

- ・佐々木昭夫『近世小説を読む 西鶴と秋成』(翰林書房・平成二十六年)

- ・平林香織『誘惑する西鶴 浮世草子をどう読むか』(笠間書院・平成二十八年)

○雑誌

- ・森銑三「書評・野間光辰氏著『西鶴新攷』」『国語と国文学』二十六巻十二号(至文堂・昭和二十四年)所収

- ・東明雅「武道伝来記について——森氏の非西鶴説を駁す——」『国語と国文学』二十七巻九号(至文堂・昭和二十五年)所収

- ・森銑三「私の西鶴研究序説」『国語と国文学』二十七巻十一号(至文堂・昭和二十五年)所収

- ・板坂元「西鶴本の問題―森銑三氏の説をめぐって―」『文学』二十三巻九号(岩波書店・昭和三十年)所収
- ・森銑三「西鶴本私見―板坂元氏の「西鶴本の問題」を讀みて―」『文学』二十三巻十号(岩波書店・昭和三十年)所収
- ・板坂元「森銑三氏に答える」『文学』二十三巻十一号(岩波書店・昭和三十年)所収
- ・松田修 宗政五十緒「読後所見・「西鶴本私見」について」『文学』二十三巻十一号(岩波書店・昭和三十年)
- ・中村幸彦「万の文反古の諸問題」慶應義塾大学国文学研究会『西鶴 研究と資料』(至文堂・昭和三十二年)所収
- ・中村幸彦「西鶴文学における武家」『国文学』二巻六号(学燈社・昭和三十二年)所収
- ・野間光辰「西鶴と西鶴以降」岩波二郎編『岩波講座 日本文学史』第十巻第十五回配本(岩波書店・昭和三十四年)所収
- ・金井寅之助「西鶴置き土産の版下」『ビブリア』二十三巻(養徳社・昭和三十七年)所収
- ・神保五弥「近代における西鶴研究」暉峻康隆 野間光辰編『国語国文学研究史大成十一 西鶴』(三省堂・昭和三十九年)所収
- ・松島栄一「西鶴の描いた武士」『国文学』十巻六号(学燈社・昭和四十年)所収
- ・前田金五郎「武道伝来記」の事実と創作『文学』三十四巻四号(岩波書店・昭和四十一年)所収
- ・江本裕「西鶴武家物についての一考察―「武道伝来記」と「武家義理物語」との意識をめぐって―」早稲田大学国文学会編『国文学研究』三十四巻(早稲田大学出版部・昭和四十一年)所収
- ・中村幸彦「西鶴入門」『国文学 解釈と鑑賞』三十四巻十一号(至文堂・昭和四十四年)所収
- ・浮橋康彦「錯綜する運命の記録」『国文学』二十四巻七号(学燈社・昭和四十四年)所収
- ・広末保「書評 高尾一彦著『近世の庶民文化』」『文学』三十七巻八号(岩波書店・昭和四十四年)
- ・浮橋康彦「武道伝来記と武家義理物語」『国文学』十五巻十六号(学燈社・昭和四十五年)所収
- ・田川くに子「西鶴の武家物―『男色大鑑』と『武道伝来記』―」『日本文学』十九巻十号(日本文学協会・昭和四十五年)所収
- ・浅野晃「西鶴武家物の方法と主題」『国語と国文学』四十八巻十号(東京大学国語国文学会・昭和四十六年)
- ・中村幸彦「編集者西鶴の一面」野間光辰編『西鶴論叢』(中央公論社・昭和五十年)所収
- ・金井寅之助「約束は雪の朝食」の背景」野間光辰編『西鶴

- 論叢』(中央公論社・昭和五十年)所収
- ・白倉一由「『武道伝来記』研究序説―創作意図に関連して―」『山梨英和短期大学紀要』十九号(山梨英和学院大学・昭和五十年)所収
- ・浅野晃「「亭」の遠眼鏡」考―『一代男』巻一の三の原拠と表現―『文学』四十三巻三号(岩波書店・昭和五十年)
- ・井上敏幸「西鶴文学の世界―中国文学とのかかわり」松田修 堤精二編『解釈と鑑賞 講座日本文学 西鶴上』(至文堂・昭和五十三年)所収
- ・松田修「西鶴論の前提」松田修 堤精二編『解釈と鑑賞 講座日本文学 西鶴上』(至文堂・昭和五十三年)所収
- ・谷脇理史「出版ジャーナリズムと西鶴」松田修 堤精二編『解釈と鑑賞 講座日本文学 西鶴上』(至文堂・昭和五十三年)所収
- ・野口武彦「浮世草子の方法―リアリズムの言語意味作用―」『国文学』二十三巻十六号(学燈社・昭和五十三年)
- ・井口洋「『武道伝来記』試論―敵討の決断について―」『序説』四月号(奈良女子大学国語国文学研究室・昭和五十四年)所収
- ・井口洋「続『武道伝来記』試論―相討ちについて―」『序説』十月号(奈良女子大学国語国文学研究室・昭和五十四年)所収
- ・谷脇理史「『武道伝来記』の再評価―「虚妄の説」の説―」『武蔵野文学』三十巻(武蔵野書院・昭和五十七年)所収
- ・谷脇理史「『武道伝来記』論序説―読みの姿勢をめぐって―」『文学』五十一巻八号(岩波書店・昭和五十八年)所収
- ・谷脇理史「『武道伝来記』の一面―武家への視線―」『文学』五十二巻十二号(岩波書店・昭和五十九年)所収
- ・篠原進「『武道伝来記』論―(悪)の造型と悲劇的世界の形成―」『弘前学院大学紀要』二十号(弘前学院大学・昭和五十九年)所収
- ・江藤峰夫「西鶴研究書解説」谷脇理史編『別冊国文学 No.45 西鶴必携』(学燈社・平成元年)所収
- ・谷脇理史「『武道伝来記』における風刺の方法―その一側面―」高田衛編『江戸文学』二号(ぺりかん社・平成二年)所収
- ・中村幸彦「本朝二十不孝」助作者考」『江戸時代文学誌』八号(柳門舎・平成三年)所収
- ・谷脇理史「西鶴作品における典拠の問題(上)―『武道伝来記』を中心に―」『早稲田大学大学院文学研究科紀要(文学・芸術学)』三十六巻(早稲田大学・平成三年)所収
- ・谷脇理史「西鶴作品における典拠の問題(下)―『武道伝来記』を中心に―」『早稲田大学大学院文学研究科紀要(文学・芸術学)』三十七巻(早稲田大学・平成四年)所収
- ・谷脇理史「『武道伝来記』の読者の問題―その諷諭を受けと

める者―」神保五弥編『江戸文学研究』(新典者・平成五年)所収

・矢野公和『武道伝来記』―敵討を凝視する―『国文学』五十八卷(至文堂・平成五年)所収

・江本裕『武道伝来記』巻四の三「無分別は見越の木登」谷脇理史編『別冊国文学 No.45 西鶴必携』(学燈社・平成五年)所収

・西島孜哉「西鶴文学総覧」谷脇理史編『別冊国文学 No.45 西鶴必携』(学燈社・平成五年)所収

・金栄哲『武道伝来記』の二重構造―「平家」素材の利用方法から―『筑波大学平家部会論集』五巻(筑波大学平家部会・平成七年)所収

・篠原進「マルチストーリーとしての浮世草子」『青山学院大学総合研究所人文学系研究センター研究叢書』9巻(青山学院大学・平成九年)所収

・谷脇理史「自主規制とカムフラージュ―『男色大鑑』と『武道伝来記』の差異―」『早稲田大学大学院文学研究科紀要(文学・芸術学)』四十四巻(早稲田大学・平成十一年)所収

・谷脇理史「西鶴の自主規制とカムフラージュ―『武道伝来記』の戦略」『国語展望』百七巻(尚学図書・平成十二年)所収

・大久保順子『武道伝来記』「大蛇も世に有人が見た様」小考『文藝と思想』六十六号(福岡女子大学文学部・平成十四年)所収

・染谷智幸『武道伝来記』巻五の三「不断心懸の早馬」木越治編『国文学解釈と鑑賞別冊 西鶴 挑発するテキスト』(至文堂・平成十七年)所収

・竹野静雄「柳亭種彦と西鶴―西鶴受容史の総合的研究の内―」『二松学舎大学東アジア学術総合研究所集刊』三十五巻(二松学舎大学東アジア学術総合研究室・平成十七年)所収

・広嶋進「西島孜哉氏『武道伝来記』成立論の検証」『近世文芸研究と評論』七十巻(近世文芸研究と評論の会・平成十八年)所収

・岡本隆雄『武道伝来記』の演劇性―趣向と人物類型を中心に―『群馬県立女子大学研究』二十七巻(群馬県立女子大学国語国文学会・平成十九年)所収

・佐藤智子「作品の研究史」『武道伝来記』谷脇理史 杉本和寛 杉本好伸編『西鶴と浮世草子研究』三号(笠間書院・平成二十二年)

・杉本好伸「西鶴(武家)批判の視座」谷脇理史 広嶋進編『西鶴を楽しむ 別巻2 新視点による西鶴への誘い』(清文堂・平成二十三年)所収

・中嶋隆「文体と作品の構造」谷脇理史 広嶋進編『西鶴を楽

しむ 別巻2 新視点による西鶴への誘い』(清文堂・平成二十三年)所収

・大久保順子「出頭」をめぐる表現―西鶴武家物と「談理」の性質に関連して―『香椎潟』五十八号(福岡女子大学国文学会・平成二十四年)所収

・中嶋隆「西鶴研究案内」中嶋隆編『21世紀日本文学ガイドブック④ 井原西鶴』(ひつじ書房・平成二十四年)所収

・木越俊介「井原西鶴『武道伝来記』『武家義理物語』西鶴武家物・開法のこころみ」井上泰至 田中康二編『江戸文学を選び直す』(笠間書院・平成二十六年)所収

・篠原進『武道伝来記』の〈不好容儀〉『青山語文』四十五巻(青山学院大学日本文学会・平成二十七年)所収

○参考 URL

・『日本名著文庫 西鶴集』(図書出版協会・明治四十三・四十五年)「近代デジタルライブラリー」

<http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/878454?tocOpen&ed=1>

・『廣益書籍目録大全 五巻』(元禄五年)「国立国会図書館デジタルコレクション」。

<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2567089?tocOpen&ed=1>

○『武道伝来記』における伝聞表現

	第一系統(「語る」「云へる」「聞く」等)	第二系統(「となり」「とぞ」等)
卷一	<p>①古今の稀物はぞとかたりつたへし(一の二)</p> <p>②此自害のさまほめぬ人なく後代にもためし有まじと聞伝へて袖をひたせり(一の三)</p> <p>③…当家稀なる者武人と其名をあげて今の世までもかたり</p>	該当なし
卷二	④…無事に此里を立退けると昔を今に語り伝へり(二の一)	該当なし
卷三	⑤…衆道の情武道のほまれ人の鑑世かたりとなつて…互に心をかよはせける。是武士の本意かくあらまほしき事なり(三の二)	該当なし
卷四	⑥をしや盛をまつ花の帽子身は墨染の櫻散る世がたり(四の一)	①…千秋楽を諷ひ柏崎の名をいはるけるとぞ(四の三)
卷五	⑧あたら落花の名残ををしまぬ人なく今に語りつたへて聞さへあはれなり(五の二)	該当なし
卷六	<p>⑨女のはたらき前代ためしなき敵うち今の世迄も語りつたへり(六の一)</p> <p>⑩驛州にありし事語り伝へて其時の太守…(六の三)</p> <p>⑪…同じ枕に是も自害してはてしを聞さへ哀はつきず(六の二)</p>	該当なし
卷七	⑫未聞の敵うちなりとかたりつたへておびたゝし(七の二)	該当なし
卷八	⑬年をかさねてむかし語りに聞きしは…(八の四)	②…其跡を弔ひけるとなり(八の一)

○『武家義理物語』における伝聞表現

	第一系統	第二系統
卷一	該当なし	<p>①そもく此女武道の油断をさせずして。世に其名をあげしと也(一の二)</p> <p>②天晴武士の一心とぞ。世の人ほめにき(一の四)</p>
卷二	該当なし	該当なし
卷三	<p>①夜もすがら。うるさく明るを待ちかねをのく城下にたち歸りて此事を語りぬ(三の五)</p>	<p>④其はたらきを語り慰み両家ともに繁盛してかたらひをなしけるとや(三の四)</p>
卷四	②…今年廿五才の夏の夜の夢物語とは成ける(四の三)	該当なし
卷五	③…わけて三所に面影残り見し人は世語りのなみた(五の五)	<p>⑤…家栄えて住けるとなり(五の一)</p> <p>⑥段々はじめの所存願れけると也(五の四)</p>
卷六	該当なし	該当なし

○『新可笑記』における伝聞表現

	第一系統	第二系統
卷一	①古代路の浅香山の麓里に忠ある武士孝ある娘の事を語りつたへり。(一の四)	①…それより人の心質直になりて、道をまもりけるとなり(一の二)
卷二	該当なし	②…まことに武士の仔なりけるとそ(二の六)
卷三	②古代人の女の人の見かぎり又其人に見かぎらるる事を語り残せし…(三の四)	③すゑく此心からの一國の仕置。事なく納りけるとなり(三の二) ④…何程となくつれ來りて御目 さすしななり(三の五)
卷四	該当なし	⑤…たちまち舌くひきりて果けるとなり(四の五)
卷五	③古代家下に神變有事を語り伝へり。(五の五)	⑥誠に無明無昧全依法性とやらん…(五の四)